慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	上古の禽獣魚形勾玉
Sub Title	On the bird or animal shaped beads (Magatama)
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.1 (1965. 6) ,p.1a- 48
JaLC DOI	
Abstract	Among the various ornamental beads that have been transmitted in Japan since the ancient times, the comma-shaped beads (magatama) (勾玉) is the most remarkable one. The bead of this type is considered originally derived from the custom of dangling the tooth, the evidence of the hunted game in primitive society. The magatama is especially significant in that, it settled down to a regular, characteristic form rather early in ancient times, that some ones made of judiate, are very beautiful, and that scarcely the similary devised objects have been found in their precedence in neighboring countries. Magatama, therefore, has been made a subject of interest and debate among the archaeologists, especially with reference to the quality of its material snbstance, judiate, and its shape. Some of the judiate magatama of the Cho-ji-gashira (丁字頭) Type, which are thought to be the oldest type, are striking. And many of the ones which were produced after the fist type are most regular in their form. The ones of agate or jusper or some other material, that are in diffused form of "コ" (ko), a Japanese syllabary of Katakana style, are found in the sites from the mound age to Nara (奈良) Period. A considerable number of magatama gatama of this sort in rather perfect form have been found in the south of Korea which was under the influence of Japanese culture at that time. As to the magatama of other types, excepting the magatama found in the shell-mounds in Eastern Japan, we have found only a few of the so-called comb-shaped magatama (櫛形勾玉) and some other magatama of irregular shapes, which are treasured by some antiquarians. Among these irregular shaped magatama, the so-caled "Ko-mo-chi" magatama (子持勾玉), that are complicated and look crude, fascinate us. On the other hand, among the large number of magatama found by chance at the old burial mounds in Kinki District (近畿地方), and preserved by amateurs, are found some comb-shaped magatama and not a small number of jadiate magatama in animal shape. Some of these are bird or fish shaped. With the flourishing of excavating activities for scientific research after the war, some more magatama of this type are unearthed in Kinki District (近畿地方) and the north of Kyushu (北九州). I dicuss here on some of them. These magatama of bird, animal or fish shape are not uniform in their designs as most of other typed magatama are. Most of them ate made of jadiate as magatama of old style. Judged by their shape, it seems that they were made before the so-called Cho-ji-gashira magatama came into being. Also, these magatama are found in the sites of Yayoi (弥生) culture, which is considered proceeding the emergence of the magnificent mound structure. And it seems that the same technique are applied to these animal shaped magatama as to the magatama of the old type. Therefor, we may safely infer that these magatama belong to the period proceeding the time when the most common ones were made. Some of these bird, animal or fish shaped magatama strike us too large to be used as ornamental beads. Some of them are made of such a precious stone as agate, and bear such earrings which we often found in the burial articles unearthed at some archaic burial mounds. (See exaples shown in Section 4). Some of these large size magatama clearly show that they were made before the so-called "Ko-mo-chi" magatama appeared. (These "Ko-mo-chi" magatama are generally considered to be found in worship places). We may conclude as following. The so-called bird or animal shaped magatama, which can be thought to be the most characteristc of all the ornamental beads in ancient Japan, seem to prove that magatama have originally been made for the purpose which is beyond the practical and, as is told in old Japanese legendaries. Futher, it seems me that they, even made by imported material and technique, clearly show the way the ancient Japanese lived at the time preceding the period when these were made.
Notes	図版:獣形勾玉, 大形獣形勾玉, 大形禽魚形勾玉
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650600-0001

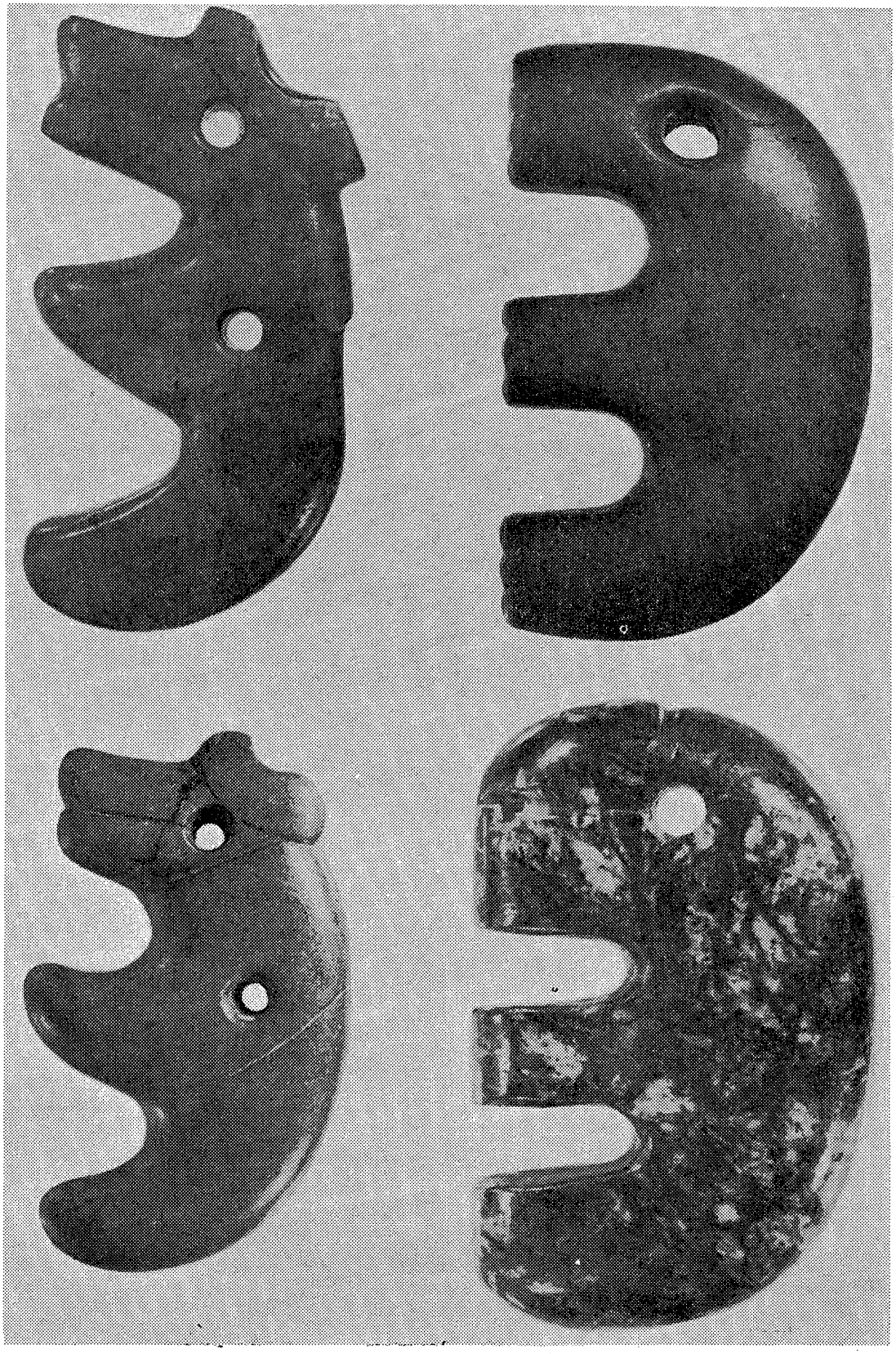
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or

publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

図版第一

獣形勾玉

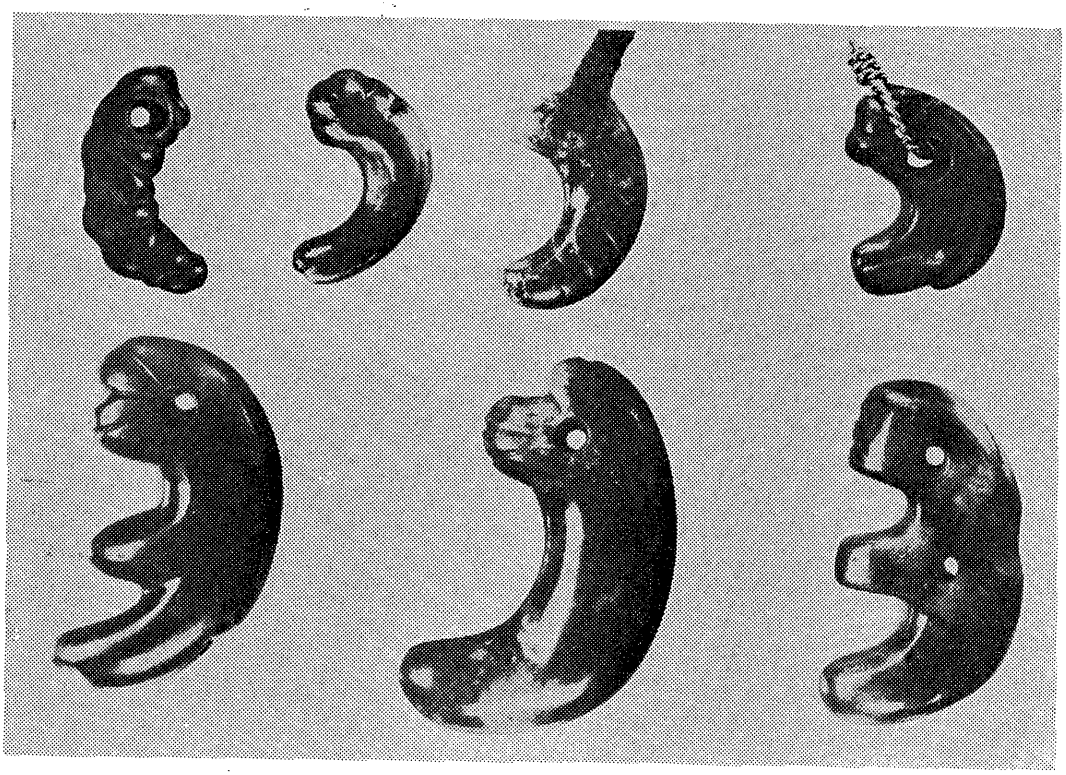


獣　形　勾　玉　（二倍大）

左上　碧玉品　武田氏蔵　　**右上**　伝河内出土碧玉品　武田氏蔵

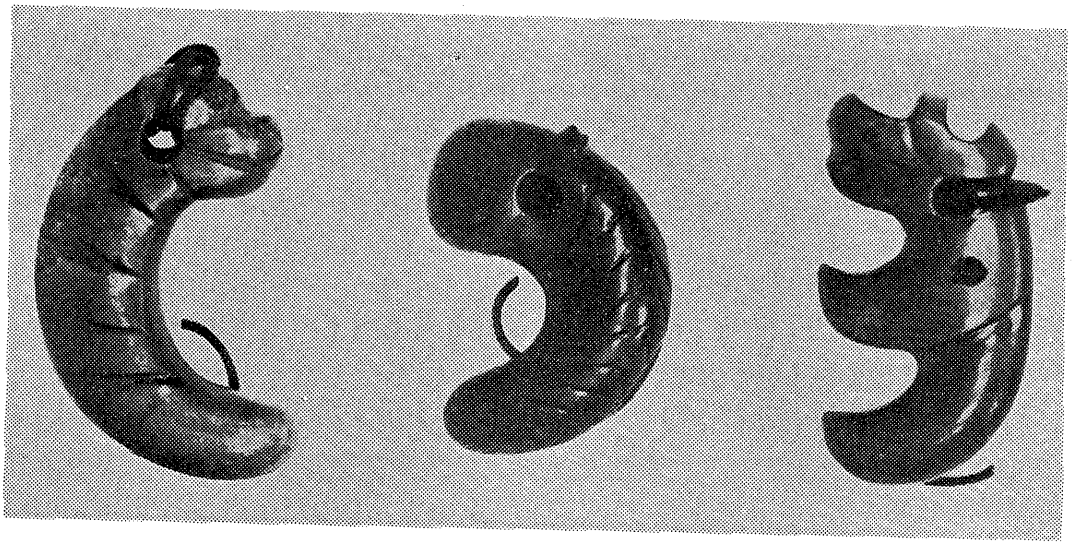
左下　伝伊勢出土硬玉品　辰馬氏蔵　**右下**　斑糲岩品　梅原蔵

図版第二　獣形勾玉



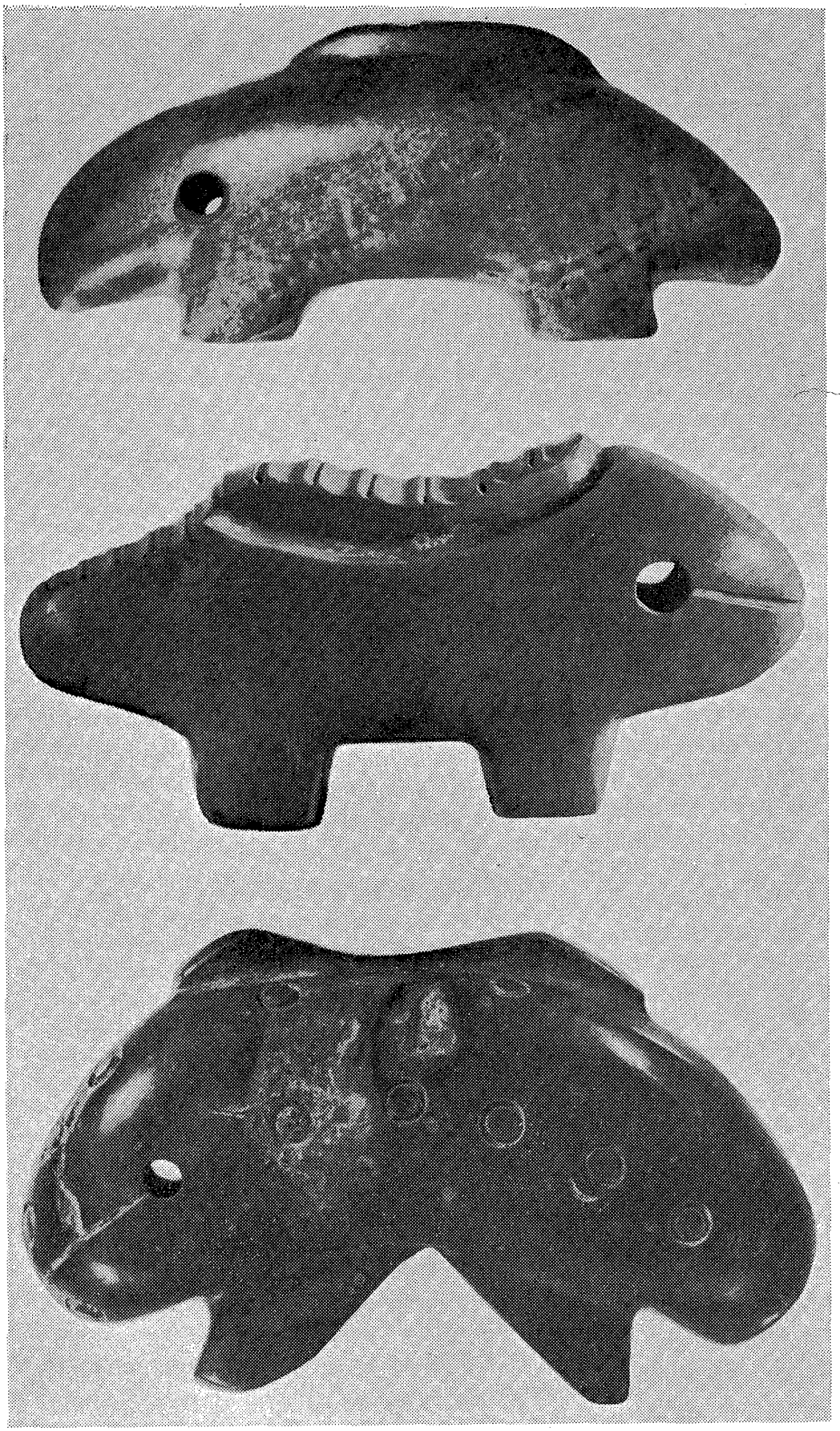
硬玉異形勾玉　白鶴美術館蔵　（実大）

左上　韓国慶州出土品



硬玉獣形勾玉　元寧楽美術館蔵　（実大）

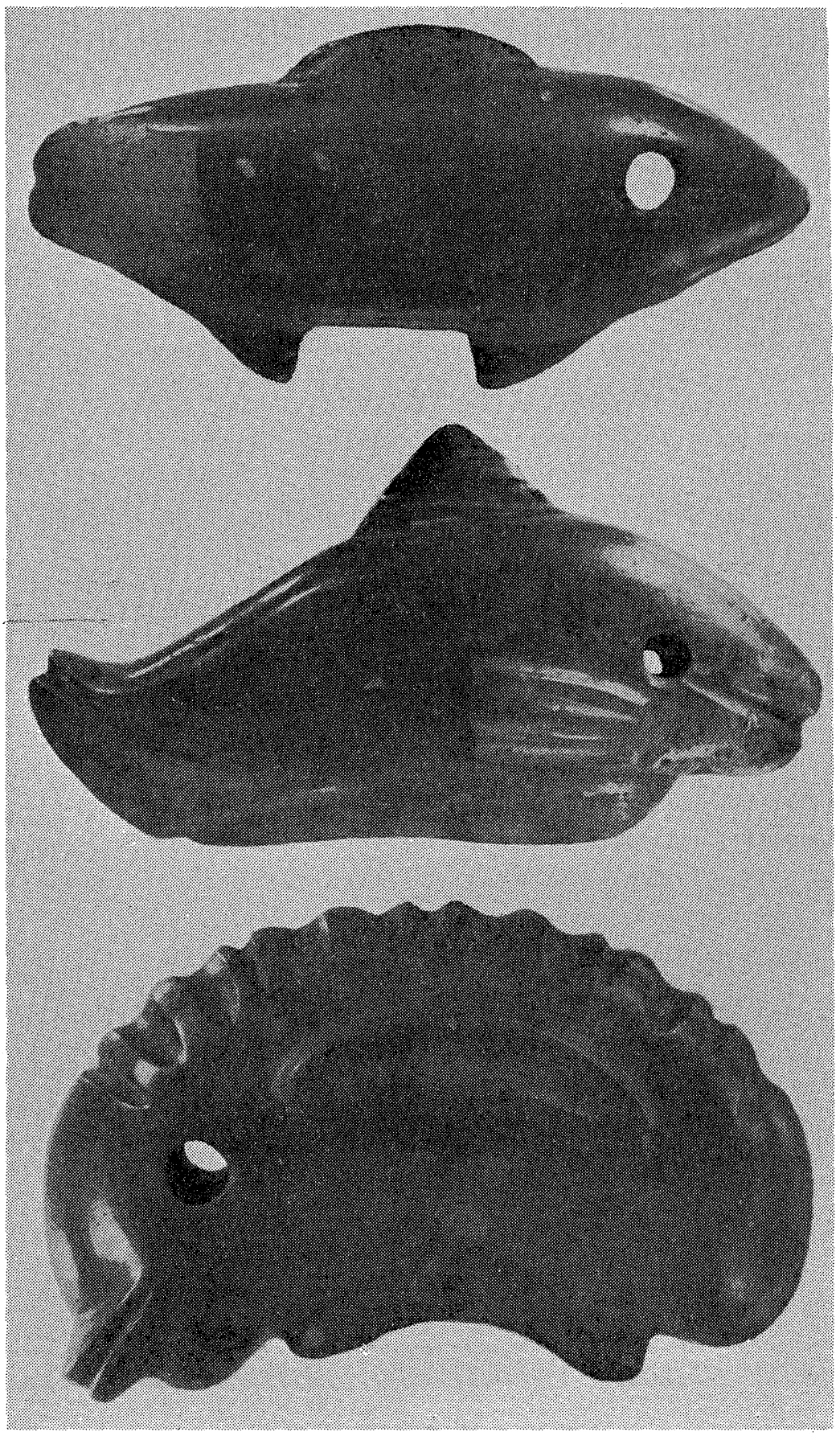
図版第三　大形獣形勾玉



碧　玉・獣形玉　　上　梅原蔵　　中・下　藤木正一氏蔵（実大）

図版第四

大形禽魚形勾玉



上・中 碧玉魚形玉　下　碧玉禽形勾玉　藤木正一氏蔵　（実大）

上古の禽獣魚形勾玉

梅原末治

一

我が上代の人々が佩用した多様な玉類のうち、最も目立つて而も特色のあるのは勾玉である。この玉は同時に三種の神器の一つに数えられて重要な意味を持つものである。従つて我が上古の数多い遺品のうちにあつて鏡と共に夙に識者の注意を惹いたものであつて、既に江戸時代の後半に於いて、時に土中から見出されるこの類の愛重を見たのであつた。明治の世になつて、新たに考古の学が伝えられ、遺品の実証的な研究が行なわれるに及んで、この勾玉に就いても、その面での観察がなされ、佩玉としての性質の攷究が進められたことである。

佩玉としての勾玉の形は、もと原始社会に見る狩猟生活の獲物に於ける歯牙を首飾として懸垂する風習に基づくものと想定せられるものであるが、現実での夥しいその勾玉類は、丸い頭部に穿孔があり、尾部えの曲つた体がほぼ一様に半月形に近い――一部欧米人士のコンマ状と言う既に特色ある形をしたものである。引いて考古学の面での考察は夥しい遺存品――特に伴出物の明らかなそれ等に基づいて進められて、形の示すより細部なり質料その他の点よりして頭部に刻目のある、俗に丁字頭と呼ばれる程よく曲つた形なり、頭尾の均衡のよくとれたものから、所謂コの字形に近い遺品の多いことが帰納されると共に、玉質の上で、右の丁字頭の勾玉に硬玉で造つたものの遺存が目立ち、また均衡のよいものなり、

コの字形品では碧玉・瑪瑙・水晶その他の材質のものが多く、なお、玻璃で作つたものの少なくないことが知られたことである。そしてこれ等のうちで硬玉――俗に翡翠・青琅玕と呼ばれる材質の所謂丁字頭の勾玉類が古くて、奈良時代の正倉院の宝庫に保存されている夥しい瑪瑙などで作つた頭部が大きくない所謂コ字形のものが、時代的に新しいとする勾玉の所謂編年観が導かれ、昭和の初になつてそれが通念化されるまでになつた。

現在の大多数の勾玉類、そして戦後各地での古墳墓の掘開で見出される同種の遺品の多くが、上に挙げた形質のいずれかに属するので、引いて伴出の他の遺品よりして一面年代そのものをもより確かめつつあること云うまでもない。併し、ここで顧みられることは、数こそ多くはないが別に早く明治以前に一部の人達が注意した、それ等と形の違うた遺品の同時に遺存することである。神田孝平がその“Notes on Ancient Stone Impliments & C., of Japan”（Tokyo, 1884）『日本太古石器考』に櫛形勾玉[1]として挙げているものの如きはその一つであり、また一部好古家の「さる玉」と呼んでいるものなり、双形勾玉・所謂子持勾玉の如きがそれ等である。子持勾玉を除く、この種の勾玉に関しては、大正の初に故和田千吉が異形勾玉として知見に上つた遺品を列挙している。[2] 然るに如上の所謂異形勾玉のうち、大形で而も形の可なり違うた子持勾玉類を除いて、現実に遺跡より発掘せられるものに乏しいためでもあろうか、爾後殆んど閑却されて、一般では時に見出さるるものの如き寧ろ異例にすぎぬとされる観が強い。

さりながらこの国でのすぐれた古代勾玉類の蒐儲で知られた神戸の嘉納・大阪の藤田両家[3]を首とする、古い同様な蒐蔵品のうちに、硬玉で作られた所謂丁字頭の勾玉類と並んで、出土地こそ明らかでないものながら、右のような異形勾玉、殊に所謂櫛形勾玉をはじめ、その類に可なり目立つたものがある。またもと勾玉が古文物として早く珍蔵せられたことから、偶然に見出された中での同じ異形勾玉が、拾得者の手を経て近畿その他の好事家の許に収蔵され愛重されて来たもののうちにも少なくないことが、近年上古遺物への興味の一般への普及につれて知られて来た。而してこれらの中には、更

に禽獣魚形を表わしたものもあつて、示すところ単なる異形と見なし得ないことを示すものがある。他方恰もこれを裏書きするものとして、戦後遺跡発掘の自由化に伴い、なおその多くは調査者の報告を見ないこととながら、また同じ類が北九州その他の遺跡地で実際に検出されて来た。かくてそれ等への新たな検討が要請されることである。

我が上古の佩玉類の実相の開明に大きな業績を挙げた先師高橋健自博士[4]に導かれて、中での特色のあるこの勾玉類にも興味を持つた私は、早く出雲に於ける玉造の遺跡の調査に従い[5]、また韓半島南部に於ける三国鼎立時代遺跡の発掘に関与して、新たに夥しい勾玉類が見出された際、それ等を調査する機会に恵まれ[6]、実物に就いての認識を深めることができた。所謂異形の勾玉にあつても、その前後に鳥取県下の遺物・遺跡の全面的な調査に当つた際、同地方出土品に所謂子持勾玉の少なくないことよりして、その集成を試み[7]たことでもあつた。その後嘉納・藤田両家蒐儲の上記の夥しい古代勾玉類を親しく調査する機会を持つに及んで、良質のそれ等が硬玉であることと聯関して、新たに示唆するもののあることに思い及ぶと共に、うちに含まれた所謂櫛形勾玉の類が、ただの異形でなく禽獣魚形に遡源するものであるのに想到した。そして現実に発掘せられた場合はなお稀であるが――尤も出土地なり遺跡の明らかなものは和田千吉氏の「異形の勾玉」にそれが挙げられている――この類での既往の出土に係る確実な遺品に接する機会が加わるにつれて、それらへの関心を深めたことである。たまたまこの数年来、身辺装飾の上で古代の玉類への一部人士の趣好の高まつたことに伴つて、地方の好事家に私蔵されて来た玉類が新たに古美術市場に出廻ることになつたが、それらの確実な遺品のうちには、出土地の伝承のある同種の勾玉が少なくない。この種の玉類の蒐集に努められた藤木正一氏なり、検出に熱心な入江喜太郎その他諸氏の好意で、是等の遺品を観察することのできた私は、従来閑却されて来たそれ等が、多数を占める勾玉に較べて単なる異形として取扱わるべきでなく、うちに一つの通じた型があること、所謂禽獣魚形をした勾玉がこれである。而してそれ等の示すところから、我が勾玉そのものゝ初現の問題に対して、新たに啓示するもののあるのが推されることに思い及ん

だのである。さればここにこれ等異形の勾玉中での主なもの――それ等の多くはなお知られていない――を列記して個々の玉の実相を明らかにすると共に、それ等から帰納される性質観に及ぶであろう。記述の初に、もとづくところの遺品の調査に関し、殊に近年新たに知られることになつた顕著な勾玉類をば、進んで提供された藤木正一・武田長兵衛・辰馬悦蔵・井上恒一の諸氏の厚意と、是等の資料たる遺品の検出に努めた入江喜太郎氏に負う所あることを明記すると共に、また調査に当つての金関恕・西谷真治・白木原和美三氏の助力と、吉沢甫博士、山崎一雄博士よりの援助を記して謝意を表する。

註

1　明治十七年刊行の此の書の図版第一七の11所掲碧玉製品。同様な玉はそれに先立つ図録にも見える。清野謙次『日本考古学人類学史』（昭和廿九年岩波書店刊）上巻第四編参照

2　和田千吉「異形の勾玉」（『人類学雑誌』第三一編第二号所載）

3　嘉納・藤田両家の収蔵に係る勾玉類は、いずれもその出土地はすべて明らかでないが、数多い上古の勾玉の中でも特に良質の硬玉で作られ形も目立つた勝れたものである。それ等は収蔵に至る径路から早く大和地方より出土したものを主とすることが推されることである。

4　高橋健自『鏡と剣と玉』（明治四四年富山房刊）

5　梅原「出雲に於ける玉造の遺蹟に就いて」（『歴史と地理』一の一）浜田耕作・島田貞彦・梅原末治『出雲上代玉造遺物の研究』（「京都大学考古学研究報告」第十冊）参照。

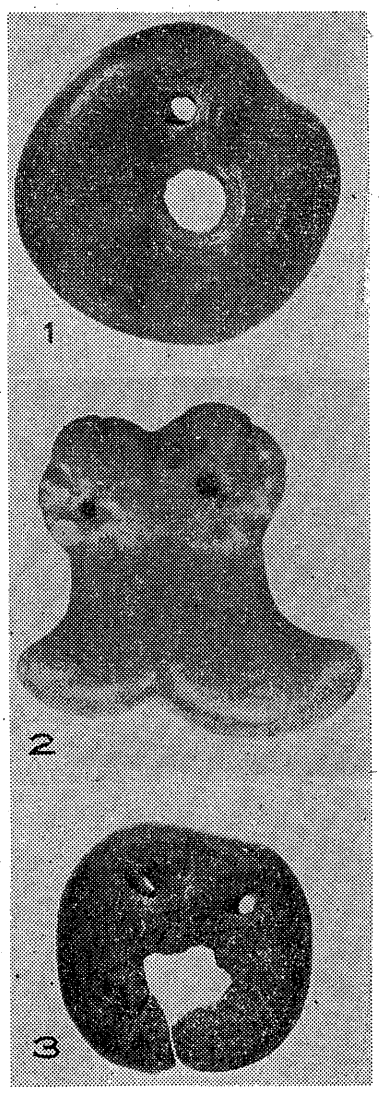
6　この大正の中頃に於ける慶州を中心とした南鮮各地の古墓群に於ける多数の勾玉の出土は、当時、特色のある此の上古の佩玉の性質観に新たなる知見を加える観を与えたものである。『慶州金冠塚とその遺宝』『慶州金鈴塚及飾履塚発掘調査報告』には、中での、慶州での著しい古墓出土の玉類を詳記して、その時代と性質を記してある。

7　『鳥取県下に於ける有史以前の遺跡』（鳥取県報告書第一冊）

二

これまで異形勾玉として一括取扱われた勾玉類は、その名の示す如く、玉として特色ある通有な勾玉に較べ、それと違

う形をしたものの汎称であること、和田千吉の「異形の勾玉」の中に挙げている実例の示すところである。併し現実の確実な遺品類――その大半は既に出土地の所伝を欠く点で、現時の我が考古学者が特に重要視する遺跡との聯関の明らかでないものであるが――を綜観すると、なお単なる孤例と見える異形品は別として、それ等には、早く江戸時代の末に櫛形勾玉として著録されたと似た著しい類をはじめ、形の上で普通の勾玉と違うた二三の目立つ類に分たれるのである。これ等の中での初に挙げた一類の遺品が数多くて、うちに明らかに禽獣魚――稀に蟲状を模したと思われる象形のものも見られることである。



第一図 異形勾玉例――玻璃品

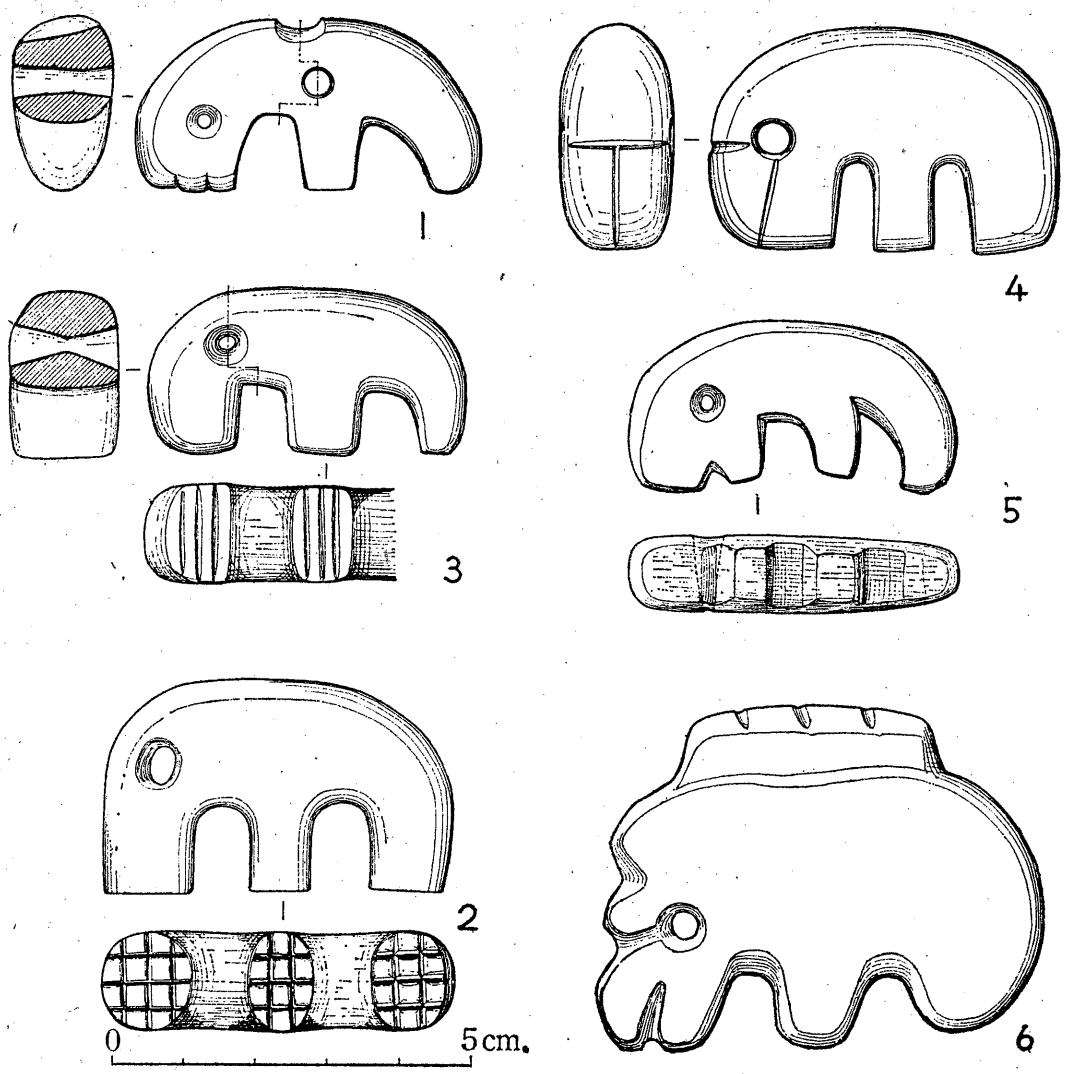
1 環状品　2 背合わせの遺品　3 相対の遺品

所謂異形勾玉のうちで、右の類と別な普通の勾玉と違うた形の一つは、基本的な勾玉の体の頭と尾が連なつて環状形を呈した、一部好事家の間に「さる玉」なる珍称で呼ばれているものである（第一図の1）。現在では段々とその遺存例を加えているこの形の玉の中にあつて、出土地の明確な一例は、筑前絲島郡一貴山古墳出土の遺品であるが、それは硬玉で作られていて、大きさはむしろ小さい[1]。然るに近年新たに大和地方に伝存したことの知られた同じ類の玻璃の玉にあつては、その他のものと共に、すべて普通の大きさのものである。形の上から環状勾玉とも名づく可きこの形をした玉に対して、次に外形の上で認められる他の違つた一類は、勾玉の背に同じ形のものを作つた、言はば複合の形をしたものである（第一図の2）。この形の玉は従来故佐伯理一郎蒐集に係る大和地方出土と認められる良質の硬玉の遺品、韓半島慶州古墓での発見例などが僅かに知られたに過ぎなかつたが、これ

も亦近年玻璃で作ったものに同形の遺品の少なくないことが認められるのである。[2] 同じ玻璃の所謂複合形の勾玉では、別に二個の頭尾を向い合せにした異形品のあることが新たに確かめられた（第一図の3）。前年長門下関市一ノ宮住吉神社境内から見出された遺品の如きがそれである。[4] なお現存例の少くない右の相対形とも名づく可き勾玉に比べると、背合せの複合勾玉の玻璃で造られたもの[3]その他には、玉の背の一方が可なり小さく、またその形の異様となっている点で、所謂子持勾玉の祖形とも見ゆる外形をしたものがある。これ等については後に触れるであろう。

さて、以上形の違う勾玉と別な目立つ異形勾玉、即ちその主なより数多い所謂禽獣魚形の勾玉となると、先ず特色を示すのは早く一部に注意されたものに所謂櫛形勾玉がある。それは三浦梅園の『尚古図録』[5]に載せた青琅玕の一例、また『太古石器攷』に著録されてあるように曲った玉の体の内側に突起を作った形のものである。『太古石器攷』には別な大きい魚形品をも載せている。一見櫛形に似た此の獣形勾玉は、和田千吉の記述に播磨国小野市旧奥村天神山古墳出土に係るもの（東京国立博物館蔵所謂琅玕品）と、武蔵国川崎市旧橘樹郡旭村大字駒岡出土の遺品（同上蔵滑石製）が著録されてある。ところでこの種の玉は現在では遺存例が稀でないばかりでなく、うちに上古の勾玉として目立つて優れた造りのものがあること、次の諸例の示す如くである。

神戸の白鶴美術館に収蔵する長さ四・五糎の遺品は、所謂櫛形玉の中での標式的な形の勝れた例である。青緑の硬玉で造つて磨研度の高いこの玉は、両側から穿つた所謂双頭円錐形の頭孔の他に、突起のある体の腹部にも一孔を穿ち、且つ背にも刳りがある（第二図の1）。ほゞ同じ玉質の長さ四・七糎の他の一個も、またよく似た形であるが、頭辺の一方は恰も口をあいたような形であつて、その部分の鮮かな深緑の色沢が美しく、腹部の突起はやや短く、玉尾と同様先端が尖り気味で、それと並行している（第三図の1）。大阪藤田美術館蒐蔵の硬玉勾玉類の中でのこれと同形の一遺品は、長さ五・四糎を測つて、頭辺の刻線は、所謂丁字頭の勾玉のものと同様である（第三図の2）。



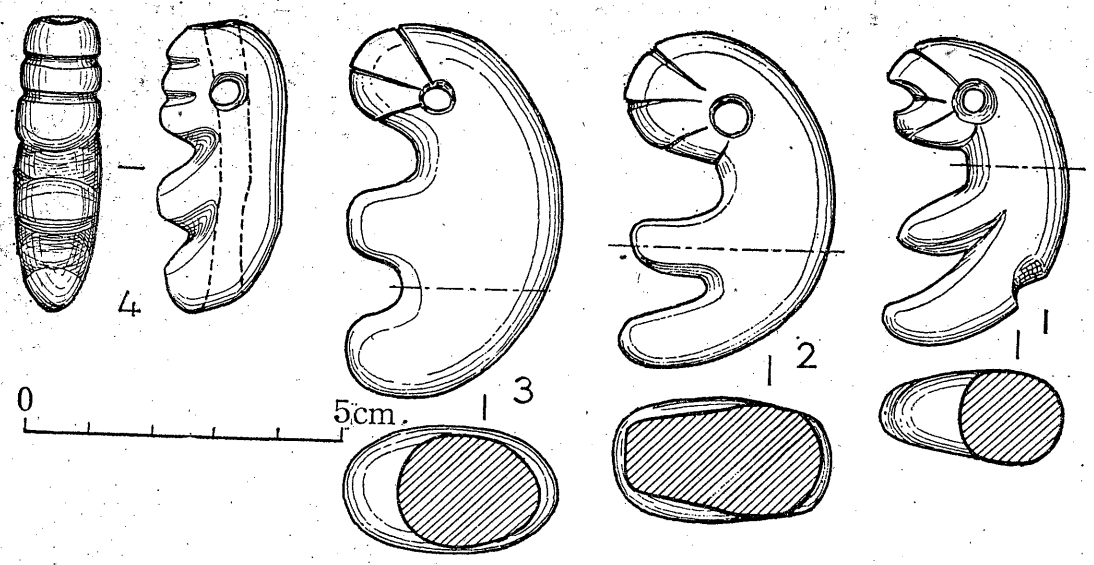
第二図　獣形勾玉（所謂櫛形勾玉）形状図（其一）

1　硬玉品（白鶴美術館蔵）　2　伝河内出土　碧玉品（武田氏蔵）　3　肥前汲田遺跡出土　硬玉品
4　斑糲岩品（梅原蔵）　5　肥後志々岐出土　大理石品（原田長文氏蔵）　6　玻璃品（梅原蔵）

同形の玉で近年新たに知見に上つたものでは、肥後植木町の高群家に蔵する、同地附近の出土と認められる遺品が先ず挙げられる。玉そのものはやや長手で前二例のと違い、造りも精良でないが、形はほゞ同じである。ただし、体の中央に竪の孔の貫通しているのが目立つ（第三図の4）。武田長兵衛氏の蔵する碧玉質の一個は、出土後伝世、発見地の所伝を欠いたものながら、長さは六・〇糎あつて大きく、頭部には丁度勾玉の頭に見ると同じ三条の切目があり、内側の突起はそれぞれ丸味を帯びて均衡のとれた肉太なその形は、一層完好なものである（第三図の3）。同じ所謂櫛形玉の好例には、河内出土と伝える碧玉品（武田氏蔵第二図の2）と、斑糲岩（Galbro）の変質した材をよく磨き上げた異質の遺

品がある。玉林一雄氏が探し出した後者は長さは四・七糎で、よく磨き上げた半月形に近い玉体の頭孔に鋭い二条の刻線と、正面の中央に鼻梁を示す縦の刻線を施して、それがよく獣首たることを表わしている（第二図の4）。もと後に挙げる魚形勾玉と共存したと伝える前者の玉も、同じ四・七糎の大きさで、頭・尾・体はほゞ等大であるが、その頭部の太い形は野猪のそれを思わしめるものがある。また突起した部分の端は平面に造って、それぞれに縦横の切目が加えられている。青灰色の碧玉で古調を帯びたこの玉は、いま全面の手なれが著しくて、出土後年時を経たらうことと、遡って造玉後永く佩用されたことを示している。

ところで現在すべて出土地を詳にせない、遺跡と游離した以上の諸遺品と殆んど同じ勾玉が、前年肥前国東松浦郡宇木汲田の甕棺墓群の学術調査で見出されたのであり、また古く肥後鹿本郡鹿央（おう）村大字広字向原（むかえはら）から出土したと認められるもの[6]のがあり、また小形ながら因幡鳥取市外の浜阪砂丘遺跡で山本三五郎氏が拾得した遺品にも、同種のものを見るのである。長さ四・五糎内外の汲田出土に係るその玉は、はじめに挙げた白鶴美術館の遺品とよく似た深緑色の硬玉品であるが、頭・腹の端に三条の刻目を加えてあるのは、伝河内出土の碧玉品に於ける縦横の切目と同巧異曲であり、且つ全体の作りなり大きさも殆んど同じである点は、或は同一工人の手になったのではないかをすらを思わしめる程である。いま原口長之氏の所蔵する肥後鹿央の出土品は、突起した部分の端に前者の如き刻み目はないが、また殆んど同じ形、そして長さは九・一糎と云ふ大形である。石材は乳白色に緑味がかった部分のある硬質である。形の上では頭側の口の切込が目立ち、また孔は一方の大きい漏斗状をしたものである（第二図の5）。[7]辰馬悦蔵氏の現蔵する浜阪出土の玉は、青緑の硬玉で作られたものながら、またほゞ同じ形をした長さ二・五糎の小形である。玉の体はやや角張って見え、頭孔は双頭円錐形状に両側から穿たれて、刻み目はない。古拙な趣のあるこの玉の面は磨滅が目立って、自から砂丘遺跡の出土品であることを裏書きするのである。以上硬玉で作られ、而も特色ある形の出土地の明らかな玉の中での、汲田と浜阪との二者が、多くの



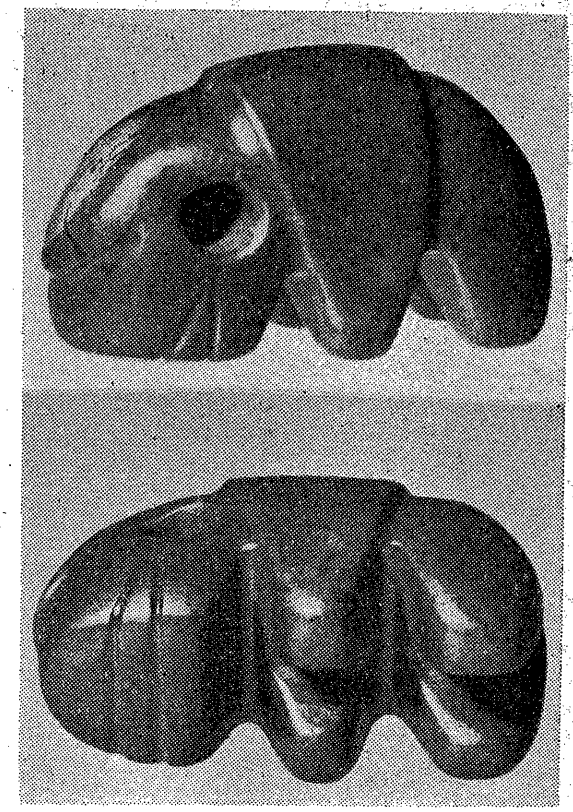
第三図　獣形勾玉―所謂櫛形勾玉―形状図　（其三）

1.　硬玉品（白鶴美術館蔵）　2.　硬玉品（藤田美術館蔵）　3.　碧玉品（武田氏蔵）
4.　肥後植木町出土品（高群氏蔵）

勾玉の場合と違つた、一般に古墳の盛行に先立つとせられる所謂弥生式遺跡であることは当然注記されるべきである。

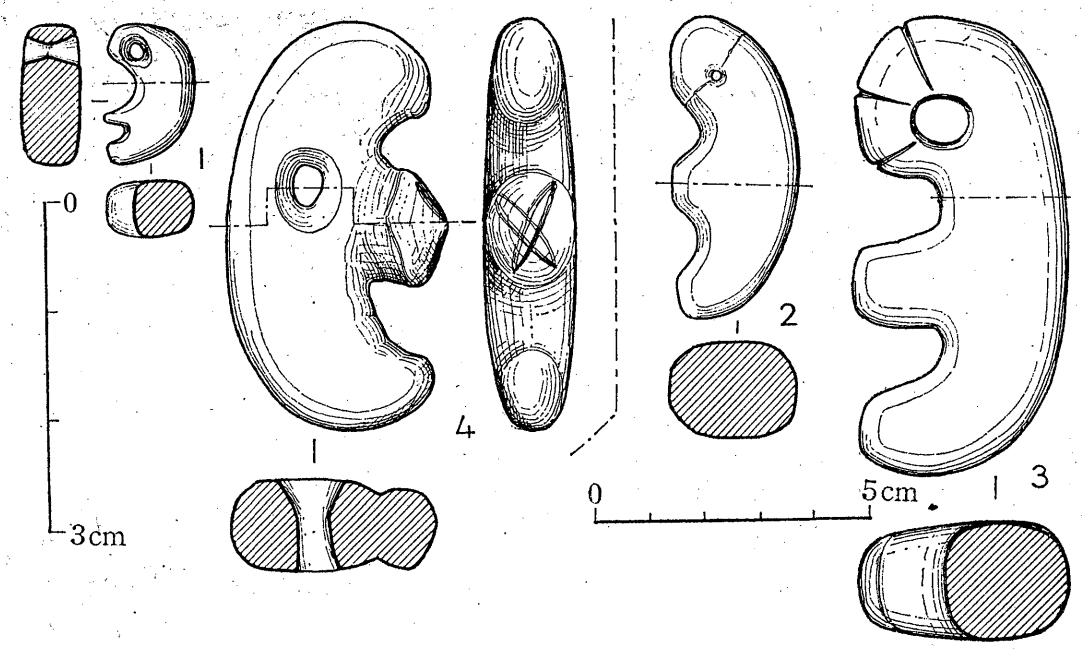
前年山陰方面から齎された一個の碧玉で作られた獣形勾玉（武田氏蔵）は、如上の諸品と似たものでありながら端的に獣形であるのを示すものである。長さ約四・五糎を測るこの玉の大きさは、上来のものとほぼ似ているが、頭部の円孔の前には立鬚とも見える小突起を作り、下方には開いた口部がはつきりと刻出されてあり、更に後半の脚に当る突起にもそれぞれ四肢を刻出する。この玉の獣形は次に挙げる古拙な獣形品と似通つたところのあるものでもあるが、造形の上に野猪の持つ量感をも具え、静的な姿態のうちに写実的な面の認められるものであること、第四図に載せた写真に見られる如くである。この点からすると、玉は示す獣形こそ違うが、作行其他の上で、寧ろ中国殷周代に盛行した数多い丸彫の諸獣玉と共通する趣のあることが顧みられるのである。

形の上で獣形をしたことの明らかな、如上の所謂櫛形玉の諸遺品と並んで、同種な遺品がなお他にも少なくない。是等の中にもと同じ形のものの便化したと認められる遺品がある。中での若干例を挙げると、玉林善太郎氏保管の遺品は、白乳色不透明体に緑色の斑条のある長さ八・三糎の大きな硬玉で、よく磨き上げてある。この玉は形が上来の諸品と



第四図　碧玉獣形玉

大差なくて、太く、真直に穿たれた頭孔の両縁辺は著しく磨滅している。丸い体の頭辺の切目は細線で普通の丁字頭勾玉に見るような形式化したものなのである（第五図の2、第六図の右）。また山鹿市志々岐出土と伝える長さ六糎の一顆は、大理石様の材質の造りで、頭部に口を示す切り込みがある（原口長之氏蔵、第二図の5）。更に出土地は詳らかでないものながら、土中古の遺品たることを示す玉林氏の得た大理石と覚しい材質の長さ六・五糎を測る大形品は、全体の形が一層便化している上に、背に三個の突起があり、両側にも方形の突起を作つた複雑な趣を呈し、これは寧ろ一般に言ふ所謂子持勾玉に近く、作行は拙である。藤木正一氏蒐蔵の長さ五・五糎を測る遺品は、濃淡相半ばする緑色不透明の硬玉質で、丸味を帯びて長手となつた両側には削つた名残をとどめているものである（第五図の3、第六図の左）。南鮮三国鼎立時代の古墓出土と認められる小倉武之助氏蔵の数多い勾玉のうちにも同様な形のものがある。数多い形の便化したものの中での、その一つに善山の古墳出土と伝える長さ六糎の大形品があり、他に中腹の突起が小さく尾端の接して造られた為に、一見玉尾が二つに分れたような外観をしたものもある。ほぼ同じ大きさのこの玉は、慶州附近の古墓から出たと云う。次に、入江氏が九州より齎し帰つた長さ三・五糎の遺品（筆者現蔵）は、内側中央の突起を鈕状に作つて端に太い格子状の刻文を加えてあり、その体には双頭円錐形の孔がある。偏平な玉の作りは他に較べると精ではない。質は雲母を含んだ片岩と認められる（第五図の4）。河内国分の出土と伝える水色不透明な玻璃で造つてある長さ五・六糎の玉（武田氏蔵）は、その長手な形が上記藤木氏の硬玉品と似たものながら、頭尾の間の内側には歯状に切込んだ三個の突起があつて所謂櫛形勾玉の名称によ



第五図　獣形勾玉（所謂櫛形勾玉）形状図（其三）

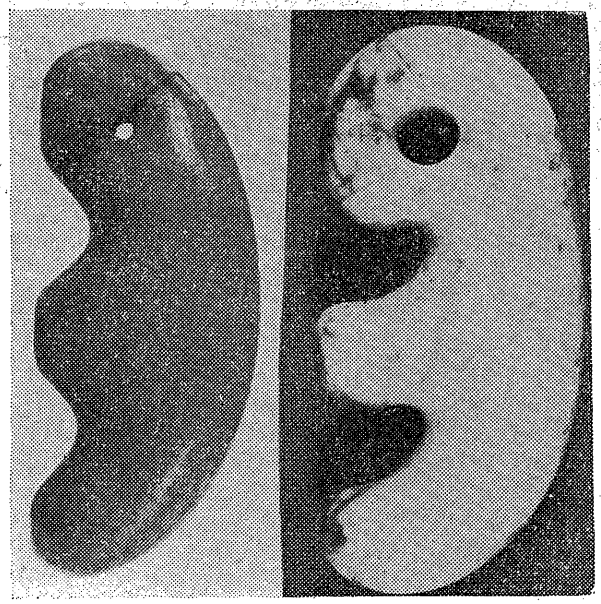
1.　因幡浜坂出土　硬玉品（辰馬氏蔵）　　2.　硬玉品（玉林善太郎氏蔵）

3.　硬玉品（藤木正一氏蔵）　　4.　斑糲岩品（梅原蔵）

りふさわしい（第一図の右）。前年東京の某蒐蔵家から世に出た同じガラスの勾玉（筆者蔵）は、玉として偏平体ではあるが、同じ類のうちでの著しい一遺品をなすものである。長さ五・六糎あるこの玉の玻璃は、還元炎の銅の配色と覚しい紅褐の間に、容解の不充分な為でもあろうか、淡い色彩の条脉が交つてあつて、而も笵で造形したことが面の歪みなどから認められる点が珍らしい。玉の示す形は頭下の口の部分をはじめ、上半がよく獣首としての特色を具えるのに加えて、背に大きな突起を作り出したのが目立ち、それに簡単な葉状の刻目を施しているのは、上来の遺品に較べて稚拙ながら一層獣形を具体的に示すのである。玻璃の笵作りであるのと併せて資料的な価値の上で注目されることである（第二図の6）。

次に凡その形の点では相似ているが、動物としてはやや別な形態をしたものを挙げると、既に記した碧玉品に近いもと大阪の藤田家にあつた遺品がある。長さ六糎を超える硬玉の勾玉としては大きい本獣形玉は、頭辺に角状の突起を造り、また上顎を表わした口辺の部分の造りが特に目立つのである。但し穿孔は眼球に当る大きな一つの他に、腹部にも小孔を穿つのは、上に挙げた玉の或者と同様である（第七図の1）。古拙な趣の多いこの玉は、緑色したたるが如き青緑の

硬玉を巧みに彫磨した造形では数多い勾玉中にあつて稀に見るところである。嚮の大戦の末期に神戸の故中村準策の許で戦災に遭うて失なわれたのは惜しむべきである。然るに右の玉と同形で約四分の三の大きさの硬玉品が、辰馬悦蔵氏の蒐集品に存在する。出土後伝世した形迹をとどめたその玉は、伊勢地方から見出されたと伝えて、玉質こそは帯白の淡い不透明な緑色であるが、その形たるや第七図の1・2に示した両者の形状図に見る如く、全く同一である。それは人をして同一工人の作品たることを想わしめるものである。質は違うがなお同じ形を青灰色の碧玉で造つた長さ五・七糎の大きなものもある。出土地の所伝を欠くが、頭部に破損のあるこの玉は、いま全面が余程手なれがしていて、示す形がまた前二者と符節を併せたかの如く同じであり（第七図の3）頭・腹にある二孔は共に鋭利な利器で穿たれて、而も縁辺が磨滅してある。

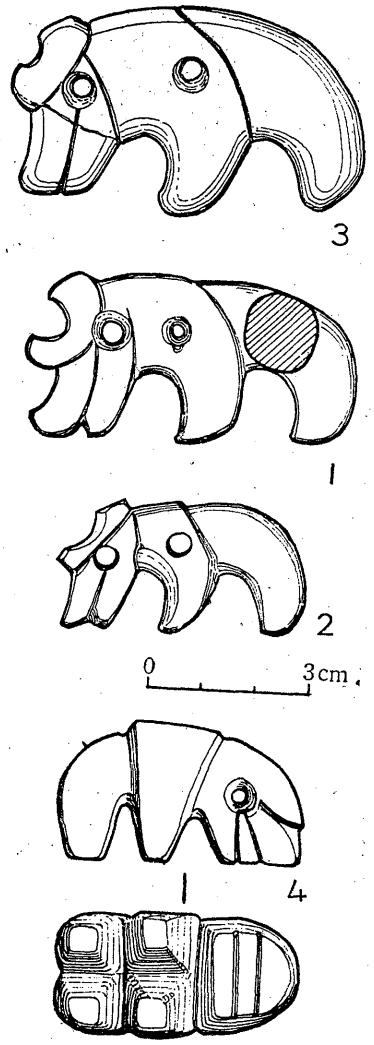


第六図　所謂櫛形硬玉勾玉の二例

右　玉林善太郎氏蔵　　左　藤木正一氏蔵

外形が獣形勾玉たることを示す相似た如上の同似の著しい諸遺品に対して、一層獣形そのものを示す同じ硬玉製の玉が、出土地の明らかな前掲の一遺品と同所の肥前宇木汲田遺跡から見出されている。この玉は同遺跡の学術調査に先立つて、土地所有者の鶴田礼造氏が甕棺地帯で収得保存していたものであつて、上記の櫛形玉なり後に挙げる同遺跡出土の玉類とはやや違つた青水色の硬玉で、長さは四・五糎である。中央に太い孔の貫通した太くて短い形をしたこの玉は、管玉と似ながら体の全面に加工があつて、現在では、可なりそれが磨滅一見異様な外観を呈する。併し仔細に見ると、第八図の上に示すように、孔の一方の上に頭部を、またその下方にある突起の側に口を開いた形が刻されて、獣首たることが認めら

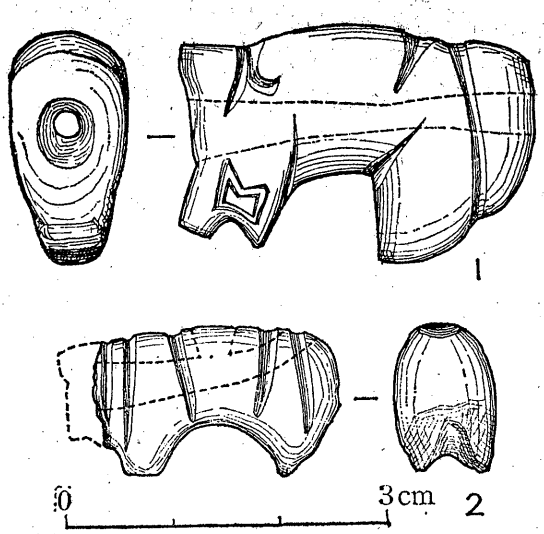
れる。これに対し他端の造りは、後脚と尾部に相当る形をそなえ、両者の間の丸味を持つ体軀と相俟つて、自から特色のある獣形をなすのである。その形は奇古ながら野猪の類を表わしたものであるのを推さしめるものである。上来の獣形の遺品に較べると、同じ硬玉で造られたものながら、示す獣形が古拙で而も、写実的であると共に、体の中央に孔の貫通するのが違う。ところで是等の点からると、別に中国古代彫玉を特色づける獣形の玉に似通つたもののあることが指摘されよう。



第七図 獣形勾玉形状図

1. 硬玉品（寧楽美術館旧蔵）　2. 伝伊勢出土　硬玉品（辰馬氏蔵）
3. 碧玉品（武田長兵衛氏蔵）　下（碧玉品（筆者蔵）

形が珍らしく、しかも出土の遺跡より推しても造られた時代の遡ることの認められる点で、我が原始的な獣形玉とも云うべき右の遺品に対して、相似たものが、なお小倉武之助氏の戦前蒐集に係る南鮮三国鼎立時代の佩玉のうちにも現存する。(8) 玉は出土の局部などは詳でないが、慶州附近の古墓の副葬品と想定される勾玉その他の佩玉と一括収得保存しているもので、長手のこの玉は、先ずよく似た形で破損した一端を磨いて平にした現長三・五糎のもので、やや上辺に片寄つて貫通した孔に対し、別に背の中央に一孔を穿つている。獣体は前者に較べると単純な観はあるが、丸味を持つた背に較べると、他方にある前後の突起端は、うちに切目を作つて明らかに四脚を表わしている。そして欠けた一方にもと頭部があつた名残をのこし、体に施した肉取りの彫りと相俟つて、古拙ながらもと同様な獣玉であること、第八図の下の形状図の如くである。かくて古く櫛形玉と呼ばれたものより、同じ硬玉で作られた是等一連の遺品にあつては、外形は勾玉に似ているものの獣形であること、換言すると、

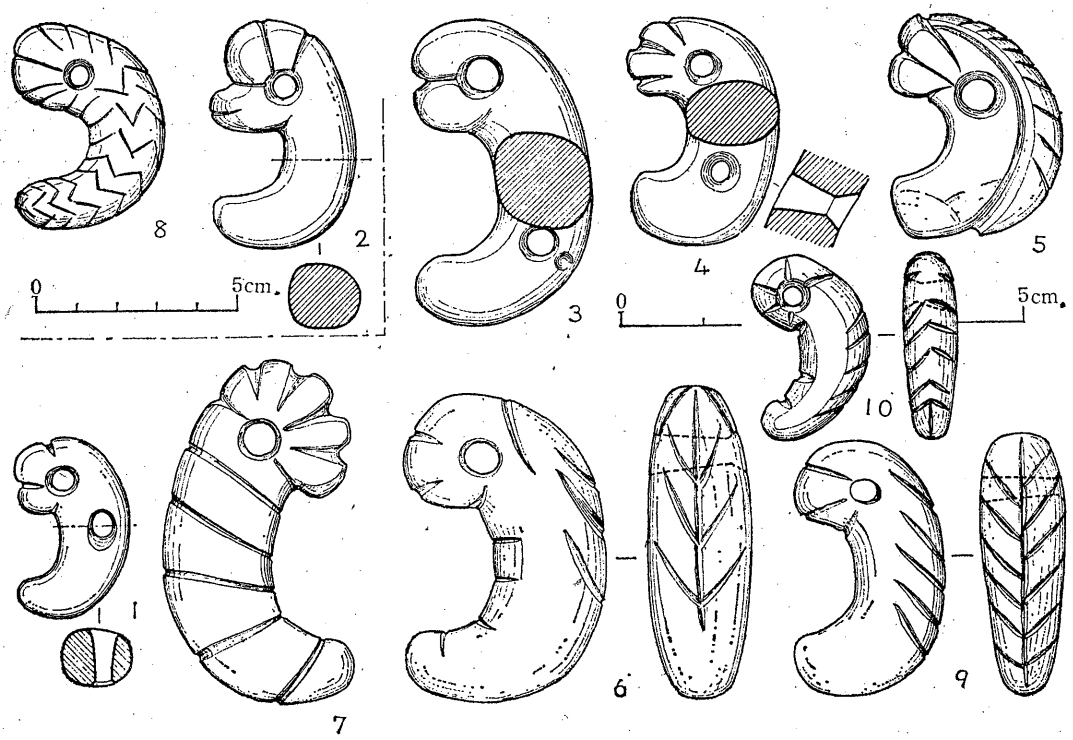


第八図　硬玉獣形玉形状図
上　肥前汲田出土品　下　伝韓国慶州附近出土品

我が上古の普遍的な勾玉に対して異色をなすのが知られることである。

さて右の獣形勾玉類にあつて、細部の上で認められる共通した著しい一つの点は、頭部の形が所謂丁字頭なる古式勾玉類のそれと同似を示すことである。而も特に良質な硬玉で造られた所謂丁字頭の勾玉類に、同様なより獣首形を示すものが少なくない。早く「異形の勾玉」に挙げている筑前糸島郡怡土町大門発見の翡翠品（許斐氏蔵）、故佐伯理一郎氏旧蔵の大和南葛城郡伝丘出土と伝える緑色したたるが如き硬玉の質で、曲つた体にも一孔のある長さ三・一糎の一個（第九図の1）の如きはその好例である。大阪藤田美術館蔵古玉中の長さ六糎の深緑色の勾玉（同図の2）神戸白鶴美術館蔵の長さ七・五糎の大きな勾玉（同図の3）の如きは、さらにこの獣首形の目立つものである。頭の上辺に突起を作り、前に口部を作つたこれ等の玉は、いずれも形体のまた優れたもので、後者は体にも一孔が穿たれてある。ほとんど同じ形をした右の二者は、質もほゞ同じである点で、この種加工の容易になし難いことより推して、また同じ優れた工人の作品でないかを思わしめるのである。白鶴美術館にある六十顆を超える勾玉中には、頭部の形が同様であるに加えて、なお別な加工のある次のようなものもある。

1　先ず玉の背の部分に細長い鰭状の突起を造つてそれに切目を加えた長さ三糎の魚とも見られるもの（第九図の5）をはじめとして、**2**　同じ玉の背の部分に綾杉状の刻紋を施した長さ三・三糎の完好な形の玉（同図の9）、**3**　相似た背の刻紋の他に、内側にも数条の横の刻み目のあるほゞ同じ長さの玉（同図の6）、更に**4**曲つた体に螺線状の刻帯を繞らした長さ四・三糎の大きさの勾玉（同図の7）などである。もと藤田家にあつて嚮の大戦の終りに故中村準策の許で焼失した十六顆の優れた硬玉の中に

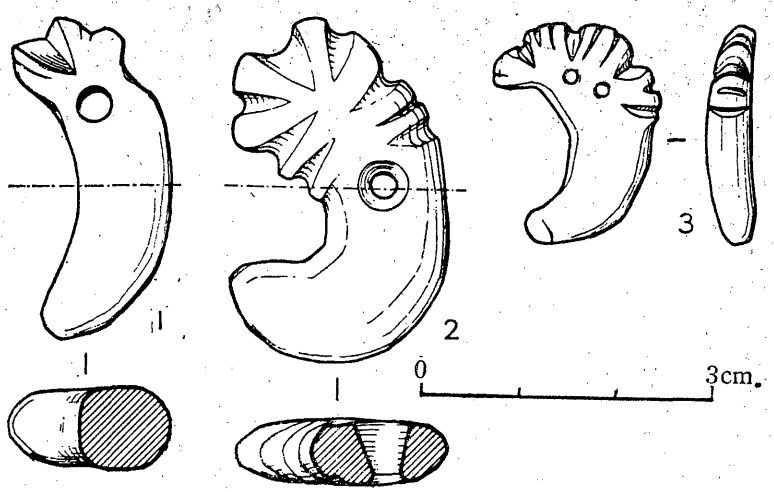


第九図　硬玉獣首勾玉形状図

1.　大和出土　佐伯氏旧蔵品　　2.　藤田美術館蔵品
3・4・5・6・7・9　白鶴美術館蔵品　　8.　寧楽美術館旧蔵品

も、頭首が目立つ上に、体に螺線状の刻み目の一層はつきりとした長さ六糎に近いもの（図版第二の下左）と、頭はやや大きいがよく曲つた体の全面に山形波紋を刻した長さ五糎のもの（第九図の8）が含まれていて、それぞれが同じ類の中でのまた個々で小異の見られるものである。(9)

同じ硬玉で作られた勾玉で、出自の明確なものは飛驒吉城郡国府町荒城の遺品である。この玉は同地の古い蒐集家として知られた藤木繁吉翁が同地荒城神社の境内で壺中に容れて見出されたものであると言う（辰馬悦蔵氏蔵）。それはやゝ濃い透明度の少くない長さ二・三糎の小形品であるが、大きな頭孔を繞つて五条の切目、また背脊にある綾杉状の刻文の他に、内側に三個の節状の深い切目が施されたその形は、上記3の玉よりも目立つのである。ちなみに、上に挙げたと同様な背に所謂綾杉紋――葉脈状の刻紋のある勾玉は、他の材質で作つた勾玉にもあること、藤木正一氏蒐集の帯黄色の玻璃の一例から知られる。それは長さ三・二糎のやゝ角張つた古拙な形のものであるが、頭辺には切目はない。



第一〇図 鳥獣首勾玉形状図

1. 硬玉品（阿形邦三氏蔵） 2. 瑪瑙品（玉林氏蔵）
3. 玻璃品（梅原蔵）

また頭部の形が以上のものとやゝ違うた二三の遺品を挙げると、阿形邦三氏の蒐集に係る長さ三・五糎の丸い体の曲りの少くない遺品は、口部の尖ったその形より見て鳥首たることを思わしめるものである（第一〇図の1）。玉林氏の保管する長さ三・七糎の瑪瑙質の玉は、頭の造りと開いた口の形に一層同じ趣が見られる。尾端が尖ったやや異形でほぼ同大の玉質の一遺品は、頭辺の刻み目が特に目立つ点で、前二者とはまた別な趣を呈する（同図の2）。青灰色の不透明な玻璃で作った長さ二・二糎の一個（筆者蒐集）は、体が扁平であって、その相似た頭部の形は恰も鶏冠を思わしめるものであり、頭孔は二つあいている（同図の3）。入江氏が昨年宮崎より齎し帰った長さ六・五糎ある大きい淡青緑色の玻璃品は、丸い体をした玉の形が硬玉での所謂古い勾玉の標式的とも見まがうばかりのもので、頭辺の切り込みは上に挙げた玉とよく似ている。

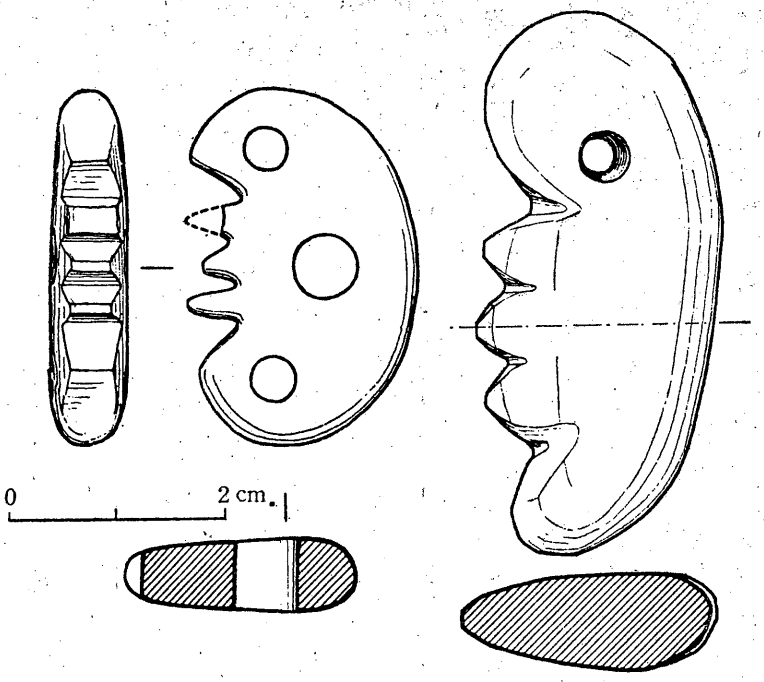
伝える数多い玻璃勾玉中の完好な二例をはじめ、現在まで入江喜太郎氏の集めた遺品が十顆に近い。第一図の1に載せたのはやや大きい中での一例である。

3 現在知られた玻璃のこの種玉の実例若干は、もと玻璃板を用いて作ったと認められるものであること、第一図の2に示すが如くである。古調を示すと共に丁字頭の右の玉は長さ五・七糎の大きさである（芦屋、黒川古文化研究所

註

1 小林行雄『福岡県絲島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』参照。同書には当時知られた類例をも挙げている。この種の玉でその後知られたものでは、白鶴美術館蔵する伝筑前絲島郡出土の黄金鎖首飾に用いた二個が著しい。梅原「黄金鎖勾玉首飾」（『考古学雑誌』四〇の二）参照。

2 玻璃のこの種の玉は、大和五条市外御山村御陵の出土と



第一一図 所謂櫛形玉

右　玻璃品（武田氏蔵）　　左　石英品（梅原蔵）

蔵）。

4 金関恕氏の調査に拠る。現在知られたその若干の例は、いずれもよく似ていて、前年福岡市外の春日町日佐原で見出されたと同様な鎔笵で作られたことを想定せしめる（第一図の3参照）。

5 『尚古図録』二編所掲異製勾玉五種中の一個の青琅玕品。大きさは長さ五糎の完好品と見える。

6 この玉の記述はすべて乙益重隆氏の調査に拠る。同氏に従うと、玉は先代高群清太氏の蒐集に係るもの。出土地の古閑はもとの山東村に属し、部落内に高塚を意味する高熊なる長さ七〇米の前方後円墳があって、その封土の一部から埴輪靫の残缺が出土しているとのことである。

7 この玉また乙益重隆氏の所報に依る。氏に従うと、玉はもとの所蔵者が数十年前に向原で表面採集して収蔵していたものと伝えて、その間に文鎮代りに使用したので一部に墨汁の附着がある他、面が手なれてある。また頭部に火に遇うた形迹もあるとのことである。

8 頭部の獣首の形をしたこの種の勾玉は、南鮮の三国鼎立時代の古墓の出土品にもその例がある。最近刊行の韓国々立博物館の英文案内書（"Guide Book, National Museum of Korea". 1964）の第六九図の玉類中にその一例を載せている。

9 筆者の許にある三・三糎の石英で作った同じ例は、櫛の形に近い体に大きい三個の穿孔があって中央のものが大きく、また内側の突起の部分を鋭く三つの歯形に作っている（第一一図の左）。

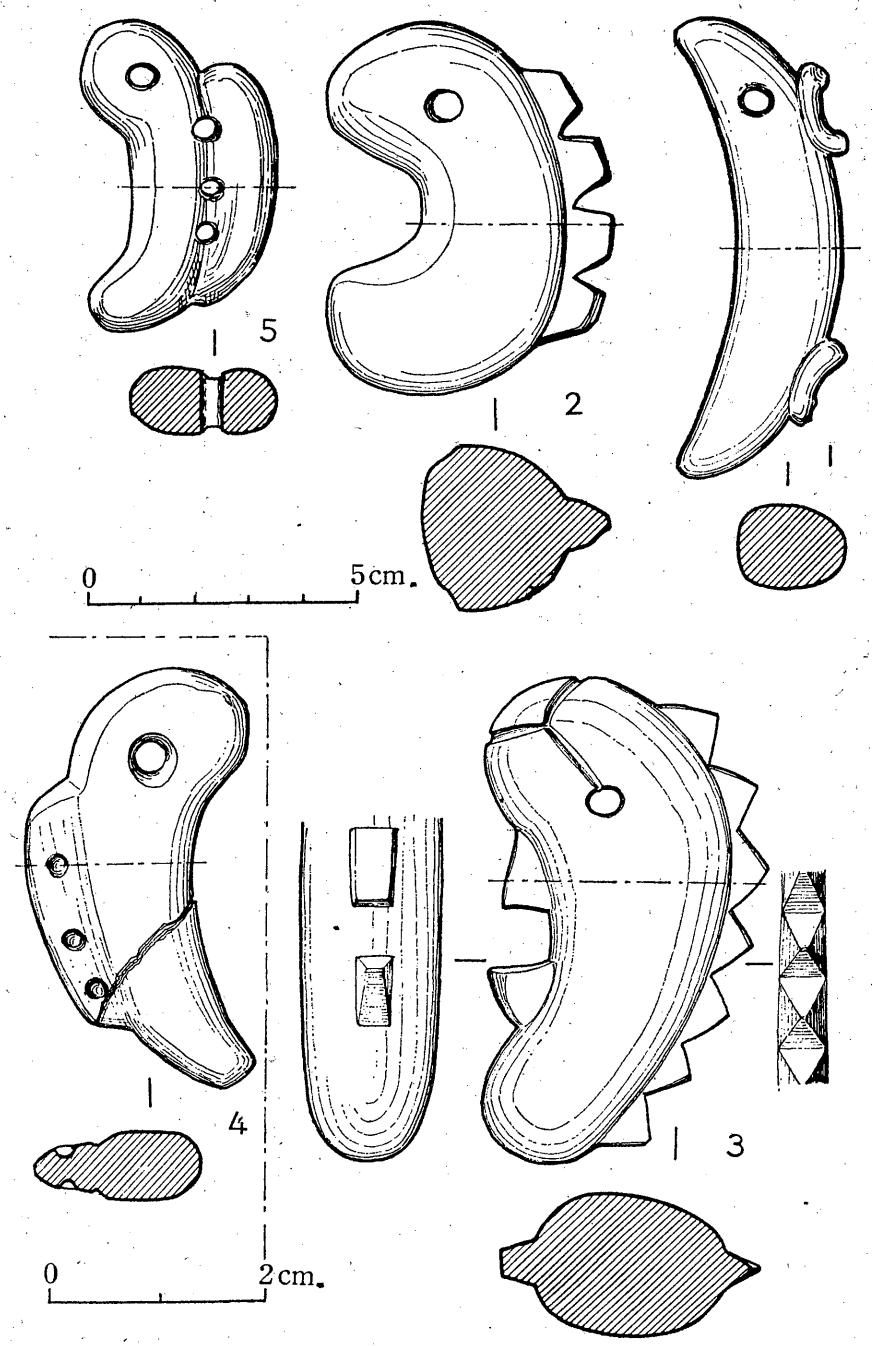
三

所謂異形勾玉のうちで、前項に挙げた諸遺品は形の上で獣形たることの明らかな類であるが、それ等に較べてなお数多いのに、その終りに挙げたと似ている頭形の玉で、別に背に突起を造つた類の存することである。上古の我が勾玉のうち背に突起のあるものとしては、主として滑石で作られた大きくて而も複雑な形をした所謂子持勾玉が既に知られていることで、現在の学界ではそれが祭祀遺跡を表徴する特殊な遺物たることが強調されている。(1) 併し、玉質の勾玉類を改めて検討すると、所謂異形玉のうちには、初に触れた背合せの複合形をした勾玉の他に、より簡単な右の所謂背脊梁の形をしたものが少なくない。而してそれ等の遺例の中には、同部の造りの工合から魚類の背や鰭なり、あるいは禽形を象どつたことの推されるものが見られるのである。

さて頭上と背とに突起を造つているこの種の勾玉として、第一三図の1に載せた遺品が、いわば一つの型をなすものである。不透明ながら玉質で造られた長さ八・一糎の大きいこの玉（藤木氏蔵）は、頭辺に作つた突起が禽形とも見られるものである。入江氏保管の似た一は、頭上の突起が長方形をして、全体の形はより簡単で、原始的に見える。長さ一二糎もある大きな瑪瑙の藤木氏新収の勾玉は、二者と違い、勾玉としてはやや角張つた太手であつて、突起はかえつて細く梁状に頭から背を通して尾端近くにまで及んだ点で、寧ろ形式化した観を呈する。(2) 近年新たに遺例を加えた同種の著しいものに、背脊の突帯が前項に挙げた赤褐色玻璃の獣形の玉と似通つたのがあつて、特に玻璃で造形したものが少なくない。第一三図の2以下に載せたのはその玻璃玉の若干例で、4は天理市柳本町上長岡ミカン山で拾得したと伝えるもの。長さ三・六糎を測るこの玉は、口を開いた頭辺なり、背に切目を加えた形の上に、よくそれが認められる。ガラスは不透明な暗緑色のもので、一部に亀裂線が見える。この玉はその真直に開いた頭孔の具合その他から笵で大体の形を作つて然るに後に細部

を彫出したものたることが推される（大下直次郎氏蔵）。5もまた同じ柳本町の旧朝和村千塚地帯で見出されたと伝え、長さは七糎を超える大きなのもの。背には突起がなく、丸い体の玉は勾玉としての基準的な造りであるが、頭辺だけは前者の玉と同形である。玻璃の質は若干の斑点のある青水色で透明度が低く且つ気泡がある（同図の5）。早く井上恒一氏の蒐集に係る2もこれと同じ質で、出土地の所伝を缺くものながら、近年同じ質の玻璃勾玉に大和南部から齎されるものの少なくないことよりすると、玉の形と相俟つて、同じ地帯での所産たることが推されて興味がある。玉は長さ七・七糎の大きさで、扁平なう長玉体の曲り工合に古調を示すが、作りや形そのものは前者とよく似ている。序ながら玻璃質のこの種の玉は、我が上古の玻璃技術の実際を窺う上で重要な示唆を与えるものなのを注記すべきであろう。次に大和地方より見出されたと言さ三・四糎の一例（入江氏蔵）は、青灰色の一種の瑪瑙質であるが、頭部は右の玻璃玉の後者と殆んど同じく、口部の恰好に一層特徴がよく表われている。磨研度の高い長さ六糎余ある大きくて完好な勾勾玉（同氏蔵）は、同じ瑪瑙質の、淡黄緑の色沢をしたもので、頭部の下辺がやや尖り、それに加えた刻み目は、丸い穿孔と併せて、獣口と見られるが、いま一つの上辺の切目の方は魚の口の形とも似たところがある（第一三図の3）。

背脊突起部の目立つ同様な遺存品には、また別にその部分の作りの違うたものがある。中で突起が細長い帯状を呈し、そのもとに沿うて穿孔のある遺品、例えば北九州出土と伝える長さ三・九糎の頭が大きくて曲りの少くなくて、背の突起に三孔を穿つた流紋岩（Rhyolite）のもの（梅原蔵第一二図の4）、それとよく似た伝河内国分出土の長さ五・七糎を測る淡い水色の玻璃品の如きがそれである（武田氏蔵同図の5）。後者と同じ形のものは他にもあつて、その一つは質も形も、同一場所で作られたことを推さしめる程よく似ている（入江氏蔵）。また頭背を合わせた複合の玉と聯関した形で、而も形の可なり違う玉もある。嘗て大和郡山地区で見出されたと伝える一例（第一二図の1）は、長さ八糎を超える大きさで、両端が尖つて弧形に近い細長い体の外側のそれ〴〵に、同じ勾玉形の小突起を造つたものである。[3] 黒褐色に近い異質の石を巧みに加工したこの玉の形は、自から所謂

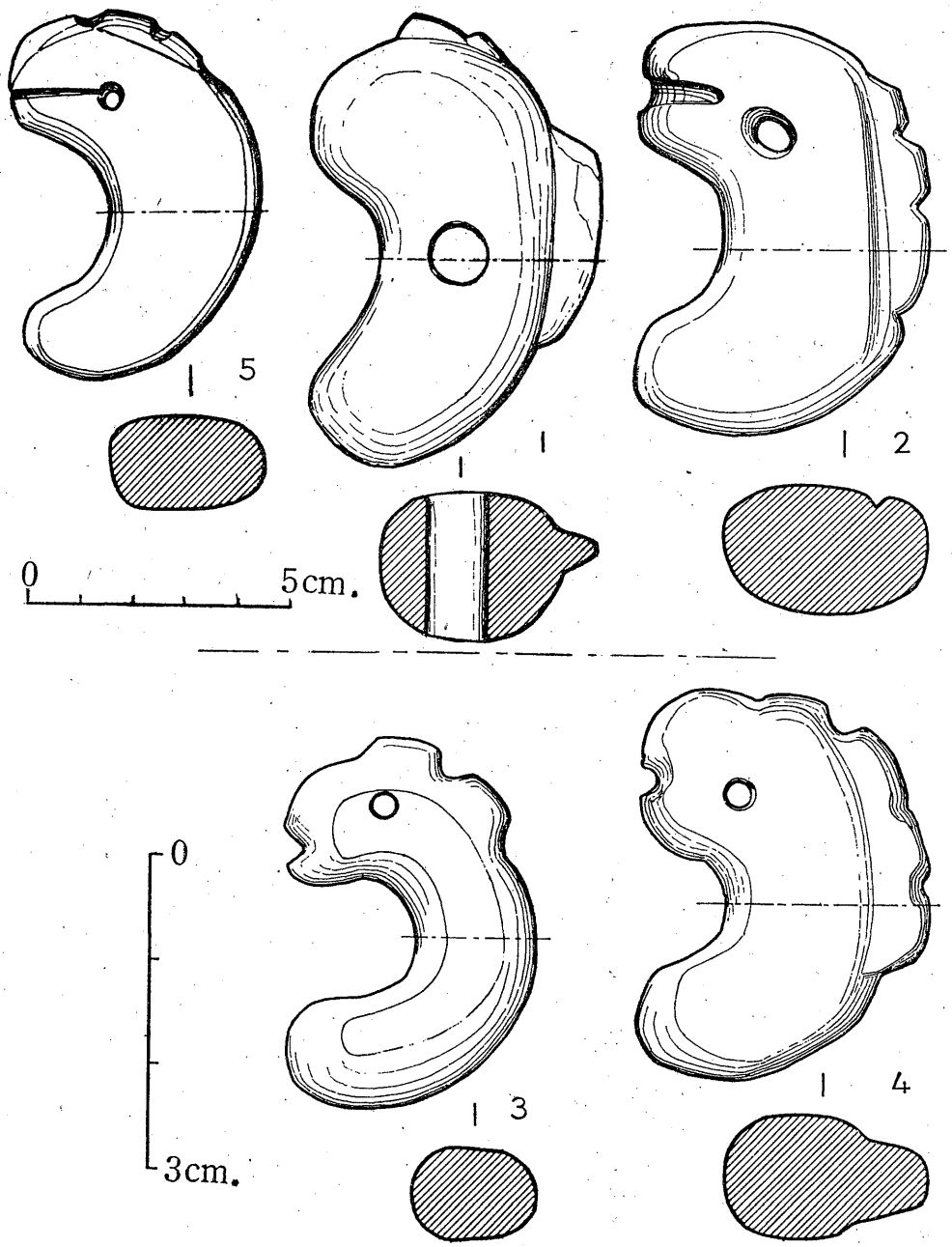


第一二図 脊背形勾玉類形状図

1. 伝大和郡山出土品（武田氏蔵）
2. 伝大和由土碧玉品（入江氏蔵）
3. 碧玉子持勾玉（同上）
4. 流紋岩品（梅原蔵）
5. 玻璃品（武田氏蔵）

子持勾玉の原始形を示唆するものがある。併し上来の諸玉に較べると、碧玉で造つた玉の中に、例えば第一二図**2**の長さ六・八糎の遺品のように、背の突起帯に深い刻み目を加えた肉太な玉が少なくない。而してこの類のうちには、同時に他の面にも突起を作り添えて、自から滑石製の所謂子持勾玉の祖型たることを如実に示すものがある。一部になお水銀朱が附着して古墳の副葬品だつたことの明らかな、長さ九糎を測る大きい碧玉品の如きがそれである。よく磨研されて面の滑

沢の度の高いこの異形玉（第一二図の3）は、やや長手な頭の大きいもので、脊背には通じて三角状に尖った突起を彫出してあり、内側にも足を象徴する相似た二個の突起を相向うて作り出しているのは、頭部にあるY字状の刻線と相俟って、謂うとこ

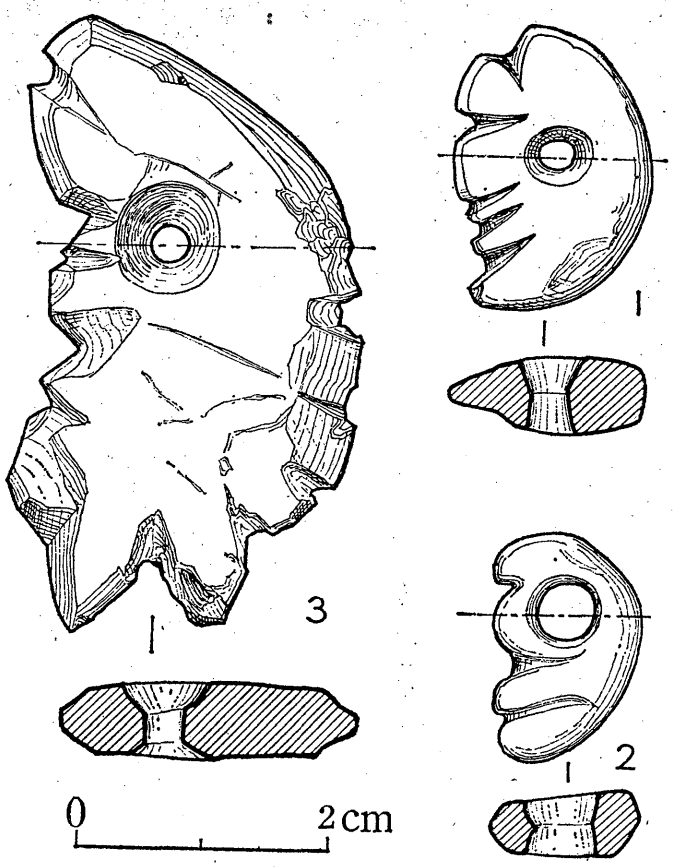


第一三図 獣形勾玉形状図

1. 碧玉品（藤木氏蔵）　2. 玻璃品（井上恒一氏蔵）
3. 瑪瑙品（入江氏蔵）　4. 伝大和柳本上長岡出土　玻璃品（大下直次郎氏蔵）
5. 伝大和朝和千塚出土　玻璃品（入江氏蔵）

ろの禽獣魚形の面影をとゞめたものと見られる（入江氏保管）。

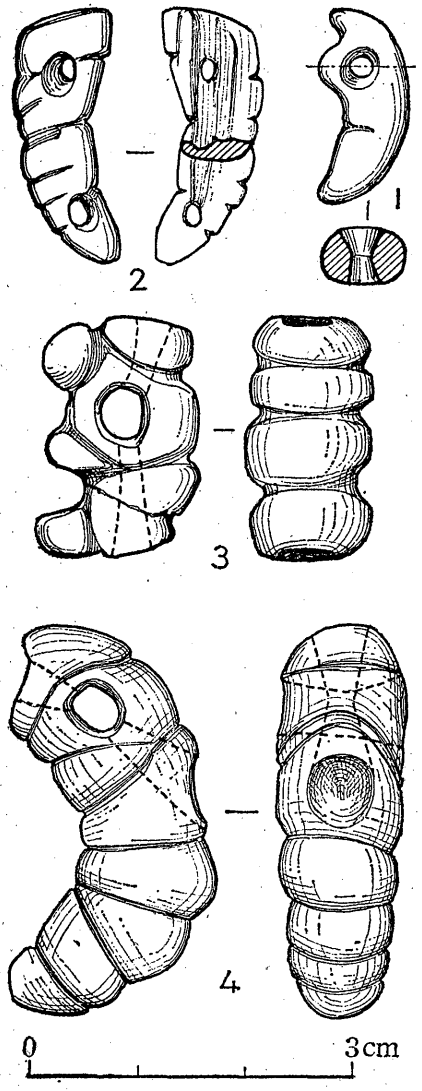
以上の所謂禽獣魚形と見られる諸遺品と相似たものでありながら、形の上では若干違うた、古拙な玉の遺存もまた稀でない。その示す形から以下是等を便宜上禽形玉と呼ぶことにする。この類は形の小さいものが多くて、その或物は、一見夙に知られている史前の所謂貝塚勾玉と似通うた形をしているが、鋭利な金属器を用いて硬度の高い石・玉を加工した点で固より区別さるべきである。さてこの種玉の中での一つの型とも見られるのは、やや櫛形に近い体の中程近くに双頭円錐形の孔を穿つて、内側に切目を加えた硬玉質のもので、藤木正一氏が蔵する長さ二・四糎の遺品の如きはその例である（第一四図の1）。これと似て、所謂櫛形玉とも似通うたところのある玉を、前年永田忠雄氏が筑前浮羽郡吉井町屋形法華原の弥生式遺跡地で、古拙な勾玉と同時に拾得している（同図の2）。玉は中央の大きな穿孔の目立つ長さ一・八糎のもので、全面が著しく磨滅してある。住居跡からの出土であることに併せ見て、成形後のながい使用の痕をそれ自体が示している。日向児湯郡高鍋町鬼ケ久保の同じ弥生式遺跡地帯で、安田尚義氏が拾得した同種の遺品は、板岩で作つた一端を欠く現長約五糎の扁平なもので、周辺に鋭い切目があつてその形に魚形を象つたのが認められる。（同図の3）。



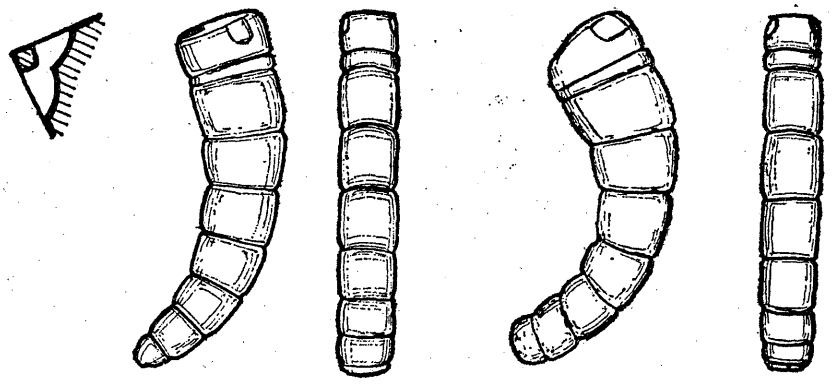
第一四図　魚形勾玉三例

1. 硬玉品（藤木氏蔵）
2. 筑後法華原出土硬玉品（永田忠雄氏蔵）
3. 日向高鍋出土板岩品（安田尚義氏蔵）

遺骸に副葬されたこの類の佩玉の著例は、肥前東松浦郡宇木汲田の甕棺墓遺跡の出土品である。既に挙げた獣形勾玉が一所に見出されていて、時代の遡ることの推される本遺跡の学術調査に於ける同時に検出された此の種の玉は四顆を数える。うち第三八号甕棺内に小形の碧玉管玉四三個と共存し被葬者の首飾玉だったと見られるその一個は、有孔の丸い体の両端が尖って牙に似た形をしたもので、内側に切目を加えてある。長さ一・八糎の小形ながら淡緑の色沢の硬玉をよく磨研して造ったものである（第一五図の1）。他の一つも一見同じ牙状の曲りの少ない形であるが、半面がもとの粗な肌をのこした扁平な体で、他の面の刻線のみが目立ち、それが虫状をかたどったことを示す（同図の2）。同じ汲田出土の他の大小二顆の硬玉の玉は、共に体の中央に近い大きい孔を中にして、上下に複雑な刻目を加えた点で一見異様なものである。これら汲田出土の四者は、牙状の単純な形の一を除くと、形の上で上記のものと同類でありながらも、また違うたところがあり、殊に後の二個は上記の諸遺品に較べると複雑な形をしてい



第一五図　肥前汲田出土硬玉佩玉(1—3)及慶州金冠塚出土硬玉品(4)形状図



第一六図　河南省殷墓出土虫状玉（実大）

る（第一五図の3はその一）。而して第三八号棺出土に係るその一個の形が珍らしく虫状を呈するのが注意を惹く（同図の2）。形が他と違うて見えるこの玉も、精粗の差こそあれ、既に挙げた獣首勾玉中の体に螺線状の刻み目を施したものと同様なところがあり、更には中国殷周代の古玉中に一層この形と相似たもののあることが顧みられるのである。第一六図に載せたのは、河南省殷墓出土に係る古玉中でのこれと同似を示す軟玉品である。

虫状をした右の汲田出土品に較べて、一層優れた造形を示す同様な遺品が、また現在白鶴美術館収蔵の古玉中にある。青緑色で質のよい同じ硬玉造りの長さ三・五糎を測るその玉は、大きな頭孔の他に、口から背にそれと連なる別な孔があつて、全面に深い刻み目を作つているのは、図示（第一五図の4）の如くである。現在玉の全面の手なれが特に著しい。ところで形の異様な中国の古玉の或者に似通つている半透明な硬玉質の本玉は、もと南鮮慶州の故松浦某氏の旧蔵品であって、それが大正十年に掘開された同地金冠塚から出土した夥しい勾玉類中の散佚した一であることは、それが白鶴美術館の収蔵に帰した径路よりしてほゞ明らかなのである。[4] 引いて出土の遺跡が六朝前半での半島での王者の陵墓と想定されるものたる点で、此の場合資料として持つ意味が大きいのである。

註

1　この子持勾玉と祭祀遺跡の関係についての所説は、樋口清之・大場磐雄両博士を主とする国学院大学出身諸氏の諸論攷を参照。子持勾玉そのものの既知の出土品はその殆んどが、数多いそれ等に収められている。『武蔵伊興』（国学院大学考古学研究報告第二冊）に載せた発見地名表は中での最も新しいものである。

2　この珍らしく大きな瑪瑙の勾玉は、出土地の所伝を缺くが、脊背の突起の一部に発見の際に受けた缺損があり、全面にあざやかな土銹が密着して、よく近時の私掘に係るものたることを示す。そして頭孔にはいまも編んだ緒紐の一部が残存している。

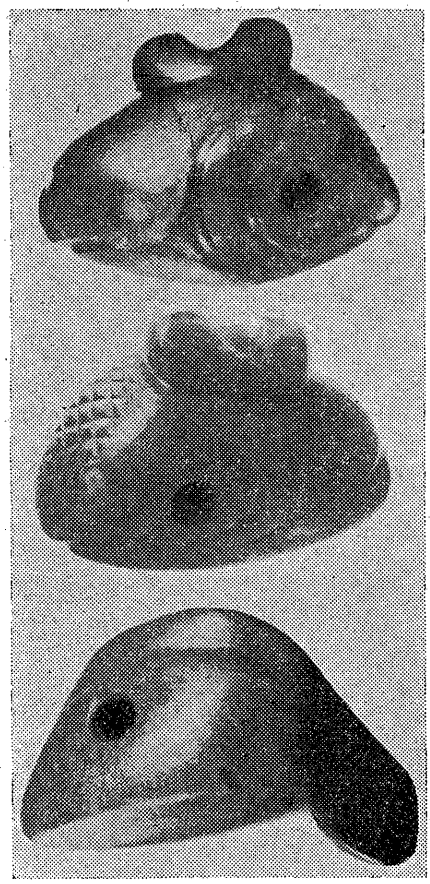
3　ほぼ同じ形の二個のうち、第一二図の1に載せたのは武田長兵衛氏の所蔵に係る。石質は京都大学理学部の吉沢甫教授の肉眼での所見によると、斑糲岩の変質したものと思われる寧ろ珍らしい質である。相似た材は大和三輪山辺に存するとのことである。

4　この玉に就いては、筆者が金冠塚出土品の調査に従事し

ていた際、松浦某氏の許に秘蔵せられているを仄聞していたが、後昭和四年秋に慶州ではじめて実物を観ることができた。その玉が故浜田博士のすすめで、同古墳の発掘に関係の深い故諸鹿央雄氏を介して白鶴美術館の有に帰したのである。

四

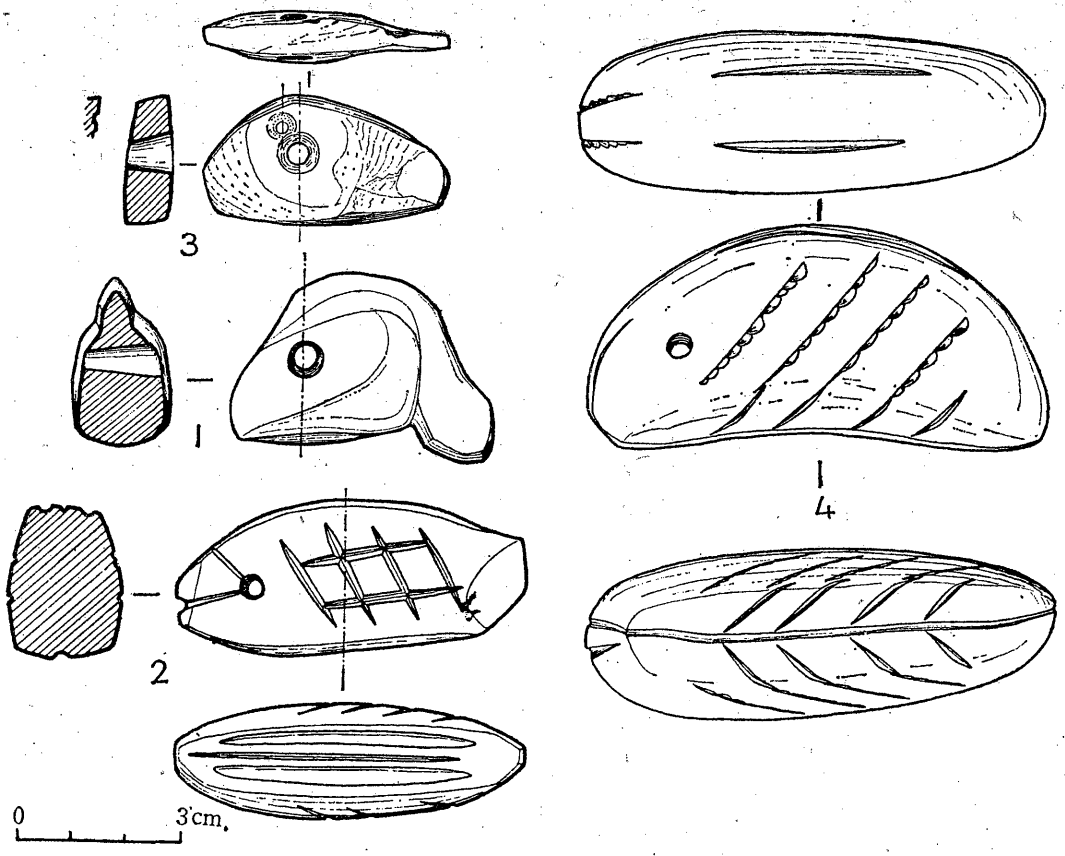
前項に挙げた勾玉の諸例は、その形から見て、大きくは本文の対象とする所謂禽獣魚形勾玉であるが、形の上で禽・魚・虫形に似たことを推さしめるものである。然るに此の類にあっても、獣形玉に於けると同様に、現在例はなお少くないが、それ自体禽魚形を端的に示すこと、既記肥前汲田出土の虫状玉の如きものがある。それ等の中で先ず魚を形どった遺品にあっては、奈良玉林善太郎氏が先代より伝えて来た所謂琅玕の玉が挙げられる。たゞしこの玉製品は本邦上古のものとして、餘りにかけ離れた形であると言うので、従来その信憑性が疑われてきた。然るに前年天理参考館に寄贈された実物を検すると、質が上来の優れた獣形勾玉と同一であるのをはじめ、珍らしいその形の彫出の技工をも全く同じくし、而も古調を呈する。従うて出土地の所伝こそ失なわれているが、その土中古の遺珠たることは疑う可くもない。さて長さ五糎のやや卵形に近い丸いこの玉は、体の一方に大きな目に当る孔が穿たれ、それに接して鰓を表徴する半月形の二条の深い刻線があり、下辺



第一七図　魚形玉

上　硬玉魚形玉　　下　伝河内出土碧玉魚形

上古の禽獣魚形勾玉



第一八図 魚形玉形状図

1. 伝河内出土碧玉品　2. 伝丹後間人出土碧玉品　3. 飛騨国府出土硬玉品　4. 碧玉・魚形品

には小さいが明らかに口を示す切込みのあるのが目立つ。更に平たく研ぎ上げた前頭には斜格子紋を刻する。右の丸い魚体に較べると、尾の部分は極めて短いながらも、尾鰭が同時にはっきりと作り出されてある。なお背に於ける背鰭の形は所謂子持勾玉の背にあるものと違わない。而も各部の彫法はすべて鮮鋭であること、第一七図の上に載せた写真の如くである。

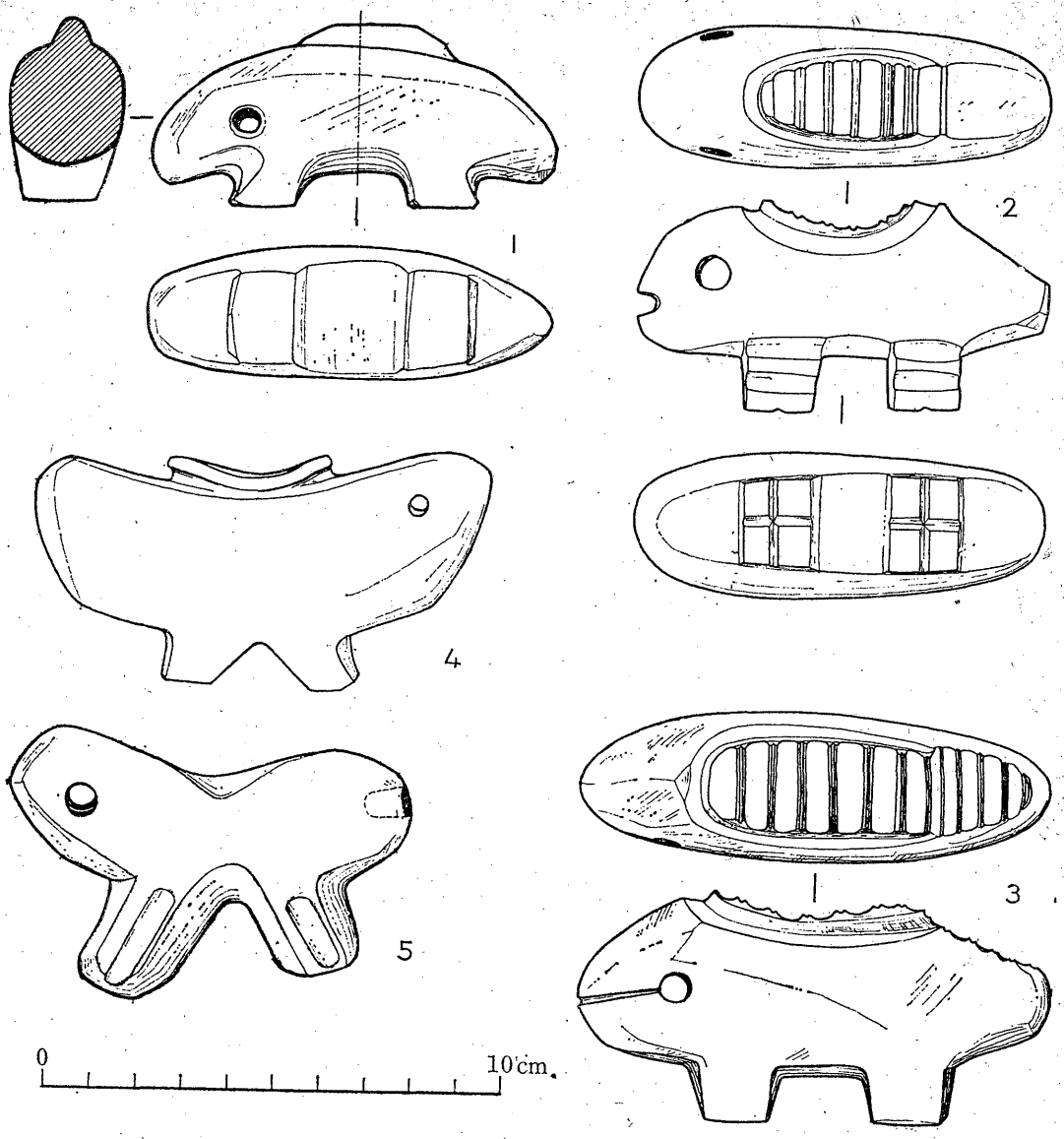
同様はっきりと魚の形を表わした碧玉の遺品で、近年新たに見出された遺例は、既に挙げた櫛形獣玉と一所に河内の古墳から出土したと伝える長さ四・八糎のものである(武田氏蔵)。玉の主体は三角形に似て、尖つたそのやゝ一方に片寄つて大きな眼孔があり、上辺の背鰭をなす部分から曲つた尾鰭がのびている。細部の表出こそないがその魚としての形たるや、恰も現在の金魚を髣髴せしめるのである(第一八図の1)。ちなみにこの玉は青灰色の碧玉で、同出したと伝える櫛形獣玉と全く同じ質で、両者共一様に磨研の度が高い。このことは出土の所伝と併せて形の違う二つの形の玉が同時代に行な

われたことを示唆するものである。丹後国竹野郡間人（たいざ）町出土と伝える長さ六・四糎の玉（蔵同氏）は、前者とは違う中膨れのした長い鰹節に似た形をした魚形で、一方に眼孔を開いて、また口を表わす条線の切目があり、扁平な体の両側には上記の玉魚の前頭に於けると同じ格子目のあらい鱗を意味する刻線がある。また他方は簡単な輪郭の刳り方で尾が表わされてある。その細長い体の上下両面に縦の凹みを作つてあるのは、前者の鰭のあるのと違うている。この魚玉は勾玉の基本形には当てはまらないで、寧ろ中国古代の彫玉に見る玉魚なり、後代の所謂魚佩の形とよく似たところがある（第一八図の2）。ここで一般の佩玉の域を超えた観のあるこの玉が、上に挙げた四足の獣玉（第四図）とその彫法を全く同じくし、而も濃緑の滑沢の多い同じ碧玉であるのが改めて注意されることである。

碧玉で造つて頭辺に穿つた一孔のみの単純なものながら、外形から同じく魚玉と認められる類で出土地の明らかなものに故藤木繁吉翁が飛騨吉城郡国府の荒城神社境内で拾得した遺品がある（辰馬悦蔵氏蔵第一八図の3）。長さ四・六糎ある扁平な玉片を用いたこの玉は、縁辺を磨研した上、一方に大きく孔を穿つた形が、魚たるに恰好なもので、古拙なそれは人をして所謂原始的勾玉のそれを連想せしめるのである。併し頭辺の孔は鋭利な金属器で一方より、硬い玉に穿たれている上に、更に一面の孔に接して穿孔の過程を示す途中でとめた迹をのこしている。

優れた遺品で、而も大きい一連の玉類がこの両三年来新たに知られてきた。特殊な作行を示す藤木正一氏其他諸家の収蔵する遺品は、いずれもが既に游離して美術品化して、うちに山陰地方の出土の所伝を伴うものがあるに過ぎない。しかしもと古墳の副葬品であつた形迹をとどめたものがあつて、形は禽・獣・魚の三者にわたり、その間に通性を示しながらもまたそれぞれに個性を具えている。而も十例を数えるいずれもが佩玉の域を超えた大形のものであるのが注意を惹くのである。[1] いま次に中で明らかに獣形を表わしたものから、その主なものを挙げる。

まずその一の第一九図の1の玉は長さ九糎のもの（筆者蔵）で、軽く弧形をした肉太な体の背の突起した形は所謂脊背勾玉の



第一九図 碧玉獣形勾玉五例形状図

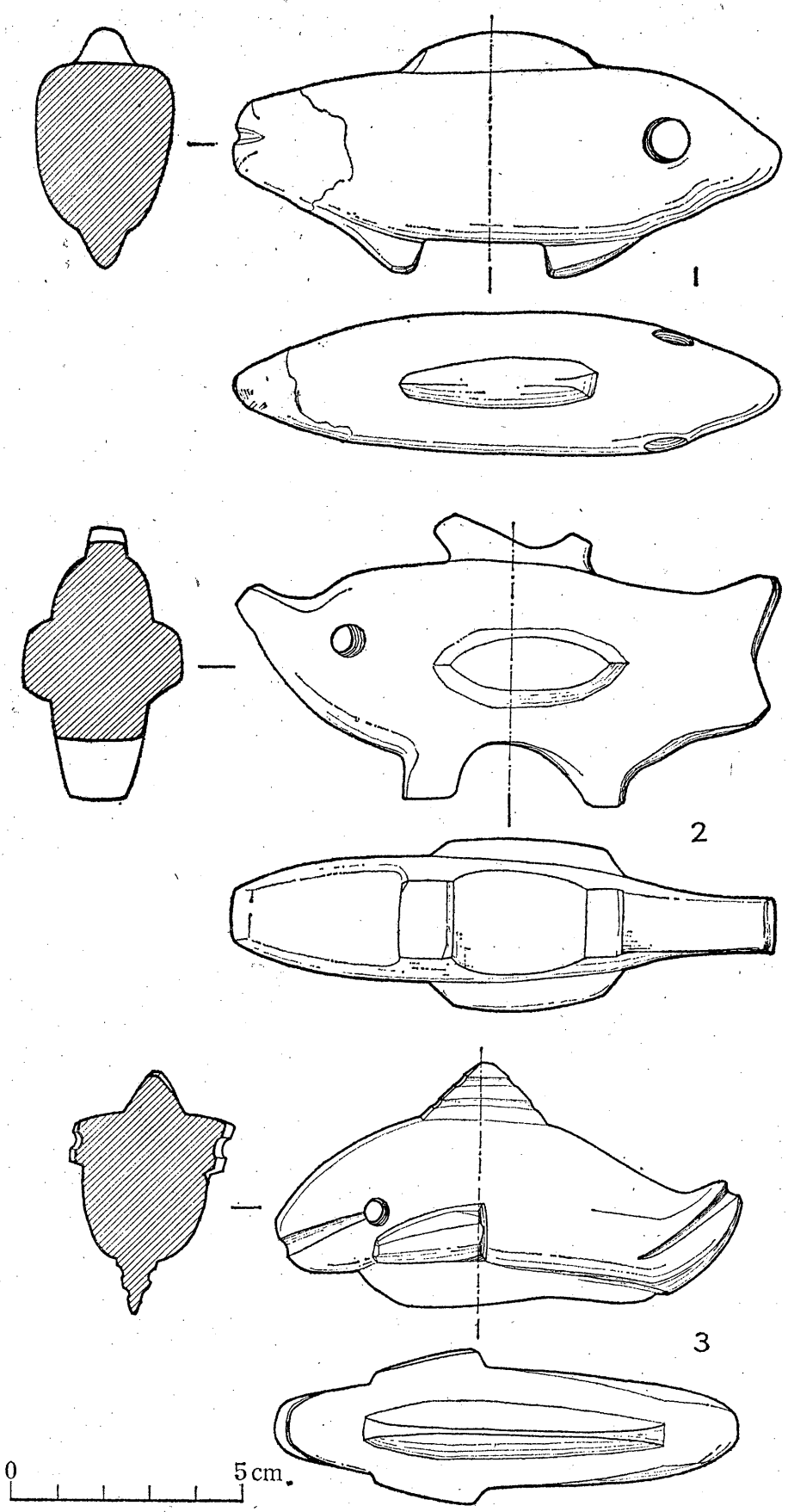
1. 梅原蔵　2. 武田氏蔵　3. 藤木氏蔵　4. 井上恒一氏蔵　5. 藤木氏蔵

面影と似ているが、曲った体の内側に前後脚に当る突起を作り出して、頭端の尖っている形と相俟って、恰も野猪を思わしめるもの。そして一見古拙な作りながら造形の点で可なりの量感を示すのである。ほぼ同じ大きさでよく似た他の二個（同図の2・3）は、共に前後の獣脚が一層目立った方柱状をした、下駄の歯に似た形をしたもので、その体軀は胴膨れのした細長い鰹節状をしている。ところで共に背は鞍の如く深く内に刳った形に造ったのが目立つ。同図の2の一は前端に口を刻し、細部の上では刳って二段に作った鞍状の上面に肉取の突帯を細刻する。大まかな刳り方は両脚の側面にも施されてあり、またそれ〴〵の裏側に十字の切

目をも加えて、脚たることをよく示している(武田氏蔵)。同図の3も背の刳つた所謂鞍の部分の条帯は全く同一であるが、この玉では同様な加飾が後半の尾の部分にまでも及び、かえつて脚には加工がなく、口を線刻で穿孔と結ぶところに小異がある(藤木氏蔵)。獣形として形の上で著しい二者の背の部分に見る帯状の刻紋は、その手法が石釧・車輪石等の刻紋と全く軌を一にしたものである。これは游離したこの獣形玉の製作の古いことをそれ自から示すものである。

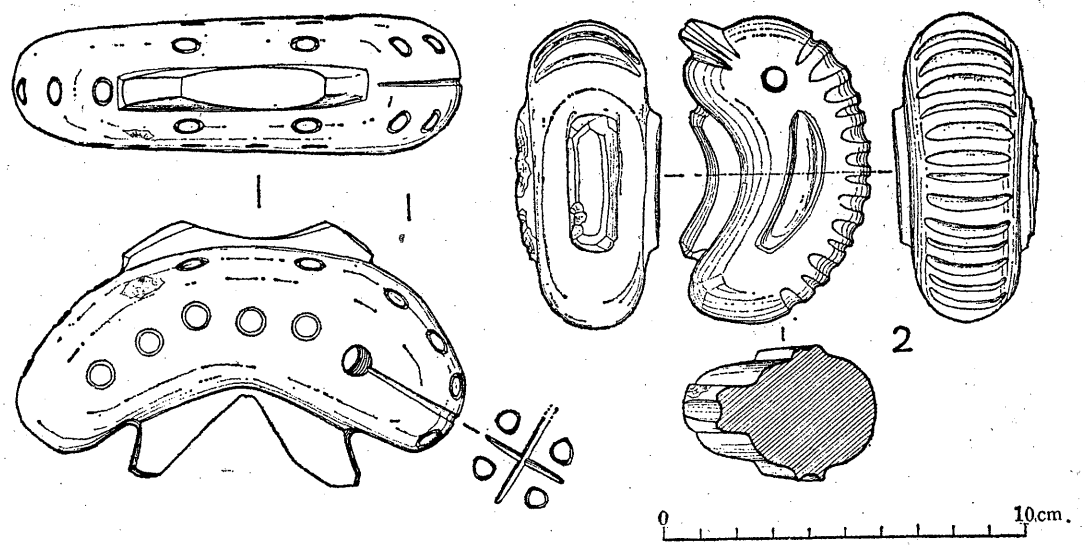
簡単な獣形をした長さ八・八糎の一遺品(藤木氏蔵第一九図の5)では、やや不恰好な曲つた玉の脊の部分に八字状の両脚を作つてある。太くて長いこの玉の前後脚の両側には凹んだ縦の条帯が通じ、また尾端にやや深い孔を穿ち等してある。古拙で簡単な形から、それは馬とも見られるものである。同様な曲つた背の部分に双脚を作つた別の遺例(同図の4)は、長さ一〇糎・高さ五・八糎を測る大きさで、体の上面に別に勾玉に似た小突起を造り添えてある。この突起は所謂子持勾玉に於ける突起飾と全く同様である。やや角張つて、尾の丸い不恰好なその軀に作つた双脚は、短かく角張つている点で他のものと違う(井上恒一氏蔵)。

次に明らかに魚形と認められる玉では、丹後与謝郡の某地発見と伝える長さ一二糎の遺品がある(藤木氏蔵)。前後が尖つて鰹節状をしたこの玉は、一方に眼に当る大きな穿孔、また他端に尾たることを示す切目がある他、背には鰭が作られ、下辺にも前後に突起があつて、その示す外形は鯉に似通つていること、第二〇図の1の形状図の如くである。玉魚の他の遺品(藤木氏蔵)は、長さ一一・三糎、細長い魚体の頭端が上に突起して、尾端の鰭が上下に拡がり、その形の上でも自からまた別な魚を表わしたことを示すものである。全面をよく磨き上げて、滑沢度の高いこの遺品では、更に背と両側のそれぞれに勾玉に似た小突起の飾りがあり、脚は八字形をして、形の上で一層佩玉の域を超えた趣を呈する。この三方に作り出された突起は所謂子持勾玉に於けるものと全く同様である(第二〇図の2)。魚形玉で殊に目立つ形をした遺品に最近藤木氏の有に帰した丹後竹野郡間人の発見と伝える長さ一〇・五糎の優れたものがある。この玉は、全体の形が尾を上げた動的な魚そのものであつて、背には三角形の大きな突起があり、両側に著しい別な長い突起——鰭——を、また下辺の腰部を長く帯状に作

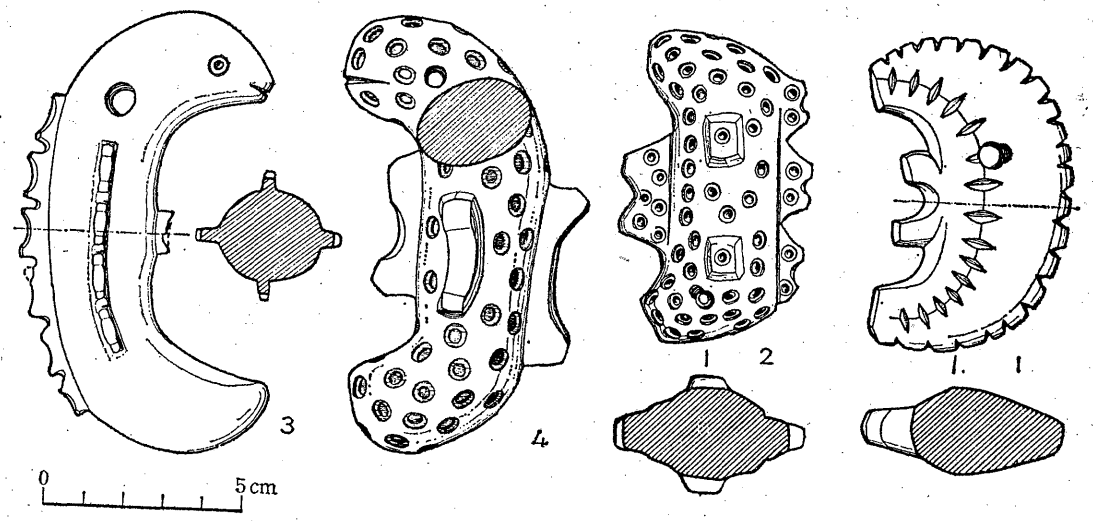


第二〇図 碧玉魚形玉三例形状図

1. 伝丹後与謝郡出土品
2. 出土地不詳
3. 伝丹後間人出土品（以上藤木正一氏蔵）



第二一図 碧玉禽獣大形勾玉二例形状図（藤木氏蔵）



第二二図 子持勾玉若干例

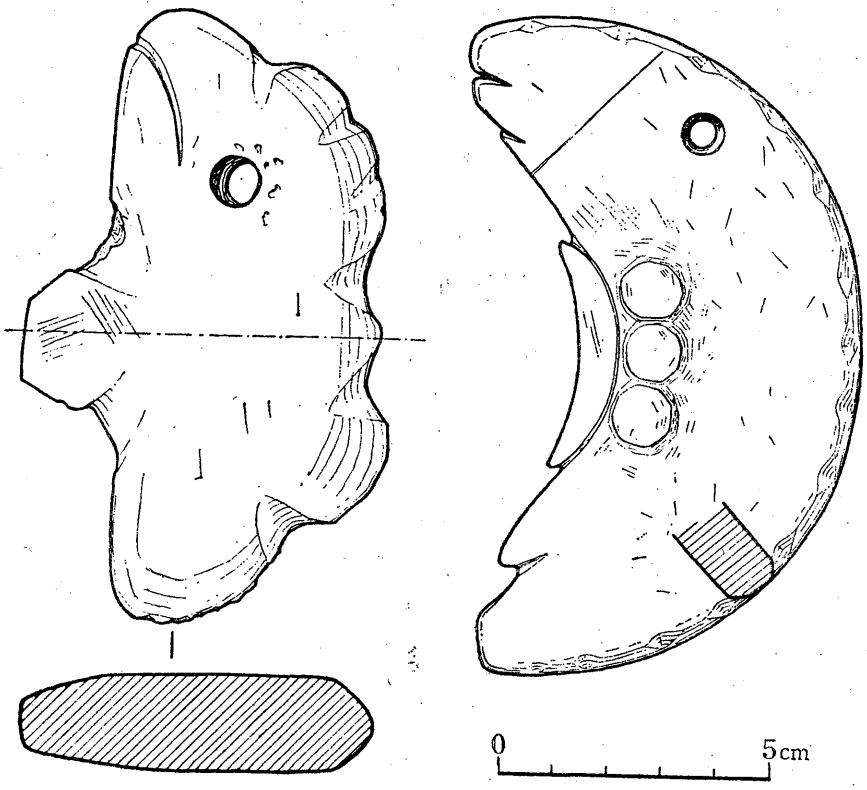
1. 伊勢秋永村出土品（故鈴木氏蔵）
2. 三河保美平城貝塚出土品（高橋儀一氏蔵）
3. 美濃大仲寺出土品（故林氏蔵）
4. 出土地不詳（入江氏蔵）

るなど、これ等の細部は明らかに或る特定な魚を表わしたことを示す。右の玉魚の形は一見飛魚かとも思われるが、寧ろ海豚でもあるであらうか。良質の碧玉を巧みに加工磨研した大きなこの遺品は、固より普通な佩玉の域を超えた、而も上古での稀な造形品であることをそれ自体が示すものである（同図の3）。

碧玉の同じ作行でありながら、体軀の別なものを入江喜太郎氏が保管している。この玉また全面が手なれて出土地の所伝を缺くが、古墳から出た形迹をとどめたもの。それは長さ八・四糎ある幅広い曲りの少ない形で、両側には目に当る穿孔からそれ〴〵四条の斜の点綴状の切目を作り、上に幅広い脊背があり、首端に鼻梁に当る刻線が施されてある。これも魚を象徴化したものと見られるが、前者とは同じでない。なおこの玉では腹部に当る幅を広く作つた面に葉脉状紋をも刻してある。刻紋は上来の古玉の或者に於けると同じ所謂綾杉状のものと同様である（第一八図の4）。

体軀の曲つたもので、獣・魚形をしたのと違う著例にまた次の二者がある。その一つは長さ一一・八糎、高さ七・三糎の大きさのもので、曲つて丸く、太い体軀の背には突起を作り出し、内面に八字状の双脚を具えた基本的な玉の形は、上来の諸例と違わないが、頭部の孔から口につづいて刻線を加えたところに差異があること、図示（藤木氏蔵二一図の1）の如くである。この玉は山椒魚に似通つたとも見られるが、体の全面に鋭い利器で小円圏を印刻してあり、装飾化が目立つている。右の全面の円圏飾は所謂子持勾玉に往々認められるものと同様であるのを記すべきである。同じ藤木氏蒐集に係る長さ八・六糎の遺品は、肉太で短い玉の背に恰も蛇腹のような連続した横帯が丹念に刻み出されてある上に、頭辺に大きな嘴を作つた頗る異色の玉である。嘴は写実的で明らかに鳥のそれであることを示す。なおこの玉では、玉魚の一と同様、三方にそれぞれ突起飾も作られて、所謂子持勾玉との形の同似が如実に認められる（第二一図の2）。この点、作りの精粗はあるが阿形邦三氏蔵の長さ一一糎の滑石製子持勾玉と外形の上で似たところがある。

以上は、新たに知見に上つた禽獣の形をした碧玉の主な遺品であるが、さてこれ等を顧みると、それ〴〵が所謂個性を



第二三図　傳大和出土禽魚形玉（拠『日本太古石器考』）

示しながらも総じて形が大きく、造玉の上で同じ技巧の通性を具えているのが認められる。同時にそれらのすべてが一般の勾玉類のうちにあつて、本来の佩玉としての性格を超えたものである。ところでそのような特色のある獣魚形の玉は、戦後の我が学界での図式的な形式観からは寧ろ異様に見えるので、出土の確でないことから、玉そのものに疑が持たれるかの観がある。併し遺品のうちに、形式の上で明らかに従来子持勾玉と共通したものがあること、一々の記述のうちに触れた如くであるに加えて、所謂子持勾玉でこれまでなおその道の人に知られていないものに、現実に如上の類の形式化したものを見受けるのである。高橋儀一氏が昭和十五年十月、三河国福江町保美平城貝塚で発掘した子持勾玉（第二二図の2）をはじめ、伊勢河芸郡秋永村出土品（同図の1・故鈴木敏雄氏蒐集品）、美濃国加茂郡蜂屋村大仲寺出土の遺品（同図の3・故林魁一氏蒐集品）の如きが、それである。即ち長さ八糎ある保美の遺品は、よく鋭利な金属器で造形した痕をとどめた古拙な体の全面に、珠円圏を飾つたものであり、伊勢出土の例は、大きさがほぼ同じで、櫛形に近い体の背に細かな切目を加えてあるのは、上記禽形の一と似て、一層古拙である。美濃の遺品は長さ一一・二糎のよく曲つた長手な丸い体の頭部の穿孔の他に、別に目と口とを刻して、それは鳥首を表わしたことを示している。[2] 同じ大きい禽獣形をした勾玉として古く紹介された、故神田孝平の『日本太古石

器考』の図版第一六の一に載せた二例のあるのが顧みられる。共に故蜷川式胤の蒐集品とあるその一は、長さ一一・六糎、他は一二・六糎の大きさの粘板岩に加工した大和出土と伝えるもの。解説に「倶に頭に口吻あり、鼻孔あり、且つ緒通し孔を以て眼に充てたり。其作意は同一人の手に出づ。是石刻の異種のものなり」とある。図に依ると（第二三図の左）前者は細長い扁平な体の内側に、角張つた突起があり、背に切り込みを作つた原始的な形のもの。その二（同図の右）も同じ扁平な体の内側に弧形の突起を作つて、これに沿うて円圏を刻してある。後者は大小の違いはあるが、寧ろ上記日向高鍋町鬼ケ久保出土の魚形小佩玉と似て、造りの上では古拙で、前述の一群とは固より同じではない。

註

1　是等一連の碧玉品で、藤木氏の収蔵に係るものに、なお蟬を表わした珍らしい玉が一双ある。この蟬形品に就いては別に新たに存在の知られた蟬形の玉と共に『史林』四八の三に記したので、ここでは省略する。

2　第二二図の4に載せたのは、入江氏が大和桜井市で得たもので、これは腹部の四方にそれ〴〵便化した勾玉形の突起飾を作つた云わば標式的な子持勾玉であり、また全面に円圏紋が見られる。而もこの玉には一方に口と目とがはつきりと表わしてあること美濃大仲寺出土品と同様である。

五

以上は所謂異形勾玉の中での禽獣魚形をした遺品で、筆者が確実と認めたものに就いて、古く一部に櫛形勾玉として珍重した数の少なくない獣形品より始めて、それに聯関する諸品を挙げ、同時に禽魚等の形をしたものに亙つて列記したものである。ところで其等の所謂禽獣魚形の勾玉類は、我が上古の佩玉として顕著な勾玉のうちにあつて、必しも稀なものではなくて、うちに既にいろ〳〵な形をした類のあることを現実に示すと共に、他方でまた単なる獣魚形をした佩玉と違い、所謂勾玉の形でありながら、そこに自から目立つた形態をしていることが自ら認められることである。

さて是等一類の玉の性質を攷えるに当つて、先ず問題とせられる作られた時代にあつては、一般考古学者が遺物の場合、

拠所とする出土の遺跡なり他の遺物との相関々係が、その殆んどがなお知見を缺いている。殊にこれが中での特に目立つ所謂櫛形玉以下一類の獣形勾玉に於いて著しい。さりながら今や実例を加えた右の獣形勾玉の多くが、近畿地方の古式古墳に副葬せられてあつたとする蓋然性を超えて、うちに若干の出土地の明らかなもののあること個々の玉で指摘した如くである。この点で肥前汲田の甕棺墓群から細形銅剣・碧玉管玉等と見出された玉のうちに、畿内地方の古墳の出土と認められるものと全く同じ所謂櫛形勾玉をはじめ、別な同種の所謂青琅玕の遺品の出土していることが特に注目される。また小形のものであるが、因幡浜阪の砂丘遺跡なり、筑後法華原などの古墳でない所謂弥生式遺跡で現実に拾得されているのは、自から勾玉の中にあつて時代の溯るものたることを示すものとせられよう。いまこれを個々の玉の実際に就いて見るも、中での著しい遺品の多くが、良質の硬玉で作られていて、彫玉の技術の上での優れたものであることは、初に触れた我が特色ある勾玉の中での古いと認められているものと同様である。頭孔の周辺に刻線のある所謂丁字頭なる中での古い形とせられるものに同似を示すことは、記述の一部で既に注記した如くである。この所謂丁字頭なる勾玉の頭辺での刻線をとりあげて、改めて、ここに対象とする獣形勾玉類での頭部のそれと較べると、後者にあつてはそれがよく獣形の頭部たることを示すものの他に、頭辺のみ同じ形をしたものから、更にそれの簡単化したものに亙つていて、この形式化した遺品に所謂丁字頭勾玉に於ける刻線との中間形を示すもののあるのが如実に認められることである（第九図）。従つてこの点からは形式の上でそれ等は丁字頭の玉に先立つものとなる。

獣形をした類に較べると、他の禽魚形なり、虫状の形をしたものは、なお数が多くないことではあるが、例えば古墳出土の禽魚形たる名残をとどめた硬玉の類に、また獣形品と聯関したもののあること、現存品に認められるところである（第九図の5及第五図の1）。その中での出土地の明らかなものに肥前汲田の甕棺墓群での目立つた硬玉品があつて同様に時代の遡ることを示唆する。なお日向持田の弥生式遺跡出土品に板岩の禽形品があるのが挙げられる。そうすると是等の禽獣魚形の勾玉

類は、我が上古の佩玉のうちでの特色を示す勾玉のうちにあつて、外形は違うてはいるが、少なくともその古いものと同様な時代なり、それに先立つて作られたもので、その実年代[1]は北九州での中国での漢時代――西暦紀元前に溯るもののあることが帰納せられてくる。

現存品の主なる禽獣魚形勾玉の右の実年代観に対して、近年新たに知られた碧玉で作つた一類―それは第四項で詳しく記したように、形が大きいばかりでなく、作りの上で所謂古拙の域を超えた点で、固より別に検討せらるべきであらう。然るに新出のこの類では、直接の拠所となる出土地なり共存の遺物などにあつては、僅かに古墳の副葬品たることを示す水銀朱附着の痕をのこすものがあるのみで、一切明らかでない、言わば考古学上全く游離した資料である。さりながら大きくて既に佩玉の域を超えたそれ等の形態は所謂子持勾玉に似通つていて、自からそれに先行するであらうことを推さしめるもののあること、既に触言した如くである。これをそれ等の雕玉の細部の技巧の点から見るに、中での馬形品の鞍状の部分その他に、いまや明らかに我が古式古墳の副葬品を特色づけるとせられる石釧・車輪石・鍬形品など一連の副葬玉類に於ける彫紋と、全く軌を一にする彫法が用いられて、その点で云はば時代の共通性を示すのが注意される。この石釧・車輪石等の碧玉品との同似は、それ等が既に装身具としての本来の用途を超えたものであるのと同様、単なる佩玉と認め難いものたる本禽獣魚形品と、所産の背景の上で形を超えて相通ずるもののあるのがまた思われることである。

従うて、玉としては、他の禽獣魚形の玉に較べると進んだ一層目立つたものではあるが、作られた時代はやはり所謂古式古墳の行なわれた時期まで溯り、それにつづくものとせられる可きことになる。これを別に見た数多い獣魚形の小さな勾玉類での個々のそれとの異同を顧みても、第四図の獣玉の如き、また第一八図の2の玉魚などに於いて、この類と殊に作りの上で同似を示すもののあるのは、右の年代観の妥当を裏書きするものであらう。

この年代観は戦後の東亜に於ける関係事項の新知見より、兼て出土遺物殊に銅剣・銅戈・銅鉾を主とする、金属文物の示すところを綜合した見地よりし、問題の肥後汲田の遺跡が須玖・三雲に較べてより時代の遡るものとする新知見に基くものである。

註

1　ここに言う甕棺墓の年代観は、今や一般化している須玖・三雲のそれに基く所謂弥生式文化編年のそれではない。右の遺跡の実年代に対しては須玖の出土品中の夔鳳鏡の実時代から当然改められる可きこと「筑前須玖遺跡出土の夔鳳鏡に就いて」（『古代学』八増刊）に於いて明らかである。

六

禽獣魚形の勾玉の類の造られた時代が、我が勾玉での所謂基本的な形での古い類と少くも同じ時代に行なわれたもので、うちに実時代に溯るものがあるとする帰納から、次に是等の玉と、所謂定型な勾玉との聯関を辿ることに依つて、是等の玉の性質観が新たに展開されることになる。

此の点で列挙して来た遺品のいづれもが、既にほぼ定型をした多くの勾玉の類に対して、その名称の示すように、外見の上で可なり別個なものであるのが注意される。但し勾玉として懸垂する佩玉たる本質に加えて、曲つた玉の上で共通性を示していることは言うまでもない。いまこれを中での現存例の多い獣玉の類について見ると、その形は曲つた体軀でありながら、獣の側面形を表わしたもの（第七図）より、所謂櫛形勾玉に亙つて、うちにその形式化したと認められるものがそれぞれ見られる。他方で従来知られた硬玉の品が目立つことである。而して前項に指摘したように獣形勾玉の頭部のみの獣形をしたものの頭首の様相に、所謂丁字頭勾玉に先行すると認められる類が見られるのである（第九図の2・第一〇図の2・3）。従うて時代の古いそれ等は形式の上で所謂通有の勾玉に先立つものであらうことが自から推される。

次に現存の玉類が硬玉で作られたものを主として、他にそれと色調の似た碧玉なり、玻璃質であることは、それ等遺存

例のうちでの優れたものが所謂丁字頭の硬玉勾玉と同じ近畿地区の古墳出土品と想定せられると共に、出土が西日本各地に亙つて、その後者の地区に、獣形そのものなり、他の禽虫等の形をしたものがあるのを併せ観ずることに依つて、既に定型となつている古式勾玉の先行の形式とする蓋然性を強めるもののあるのを思わしめるであろう。

改めて指摘するまでもなく、我が勾玉はそれが原始代に行なわれた狩りの獲物たる歯牙佩用の風を承けたものであるにもかかわらず、古墳出土の古いものに於いて既に特色のある形をした硬玉質のものが目立ち、同様なものは現在のところ南鮮地方を除いて、四隣の古文化圏に未だ見受けない。これは自からこの国土での特殊な所産として、基くところのより原始的な玉のそれに先立つ時代にあるべきことが一部人士に依つて考えられて、追求もなされたことである。そして終戦後その面でこの国土での史前文化のながくつづいた東日本各地での所謂縄紋文化後半の遺跡より、時に出土する原始的な勾玉類所謂貝塚勾玉に現実に野獣の歯牙に穿孔したものの他に、硬玉質其他の異形飾玉の遺存がが挙げられ、うちに一見似通つたものがあることよりして、硬玉そのものの同地方での存在の探求と共に、学界の注目をあつめたことである。

併し問題たる古い本勾玉類は既に一定の形をしているのに対し、見出される右の原始的な玉は形が区々で且つもとの玉・石片の形のままのものたる点で、その間の差異が目立つ。更に硬度七を超える硬玉に加工した勾玉の雕玉の技術は、明らかに石器時代の文化の段階を超えた高いものであるところから、固よりそれに先立つたと認め得べくもない。雕玉の技術の面では、この国土で先づ高い大陸文化の波及した西日本での新たに知見に上つた硬玉での獣形勾玉の類は、上記の形の示すところに相俟つて、それえの直接な先行のものであることが当然認められる可きであらう。

現存の獣形の勾玉類が我が特色のある勾玉の中での古式のそれに先行するものであるとするこの如き所見について、他方で時代の溯るより古いそれ等の玉類のうちに、良質の硬玉で、而も雕玉として頗る進んだもののあること、更に肥前汲田の出土品其他に、一層獣形をしたものと共に、虫状其他の同様なものの存する事実は、単純な遺物の形式観なり勾玉が

この国土での特色のあるものとする既往の見解に立つと或は異様に思はれ、それに疑をさし挿ましめるやに見える。併しこの国土での勾玉を作つた金属文化は、もと永い史前の生活のつづいたところに、東亜大陸に早く発達した高い文物が所謂農耕の文化と共に波及して受容され、急激に発展したものであること、金属利器其他もろ〳〵の文物より見て疑いを容れない。佩玉としての玉にあつても、大陸殊に中国本土で既に古く殷代に豊かな発達を見た雕玉の術が、材質たる硬玉―恐らくそれは東南アジアの原産であらう―と一所に伝えられたものたること、既に周知の白銅を以て作つた古鏡と同様であること殆んど疑う可くもない。

我が古い勾玉の用材に見る多量の硬玉が、当時遠く離れた東南アジアから齎されたとするについては、疑念があるとして、この国土での硬玉の原産地が嚮の戦時中から特に探求されたのは周知の如くである。爾来その分野の熱心な探査が先史学者の手でつづけられた結果本州中部での越後の一部でやうやく、その存在が確かめられた。ただし現実には、それは同地方での所謂史前の原始的な玉の材たるにとどまるものであるのが同時に知られたことでもある。従つてここに問題とする古い獣形勾玉はじめ多くの古い勾玉の用材たる硬玉は、当然外来のものと認む可きである。而して此の場合、上記の古い獣形硬玉の勾玉のうちに、肥前汲田甕棺墓から出た一例（第八図の1）の如き、また虫状の垂下玉（第一五図の1・2）など、それ〴〵のところで指摘した、中国での古い古玉に類似を示すもののあることこそは、材質と照応する事象たることが思われるのである。(I) 碧玉で作られているが明らかに四足獣形をした遺品（第四図）、同様な外形で而も古拙な硬玉品を含んだものなども、その形態の上でまた、中国の古代に盛行した獣玉に似通つたところがある。明らかに中国を通じて伝えられた西方での玻璃の材質で造つたものに同様な獣玉の遺品のあるのは第一三図3・4・5の如くである。さればこれ等の類こそは、この国土で中国から進んだ雕玉の術が伝えられた初期に於いて、同時に齎らされた稀な硬玉を用いて、その風を受けた人達に依つて新たに作られた玉に当るであらうことが推されるわけである。而も是等遺品は、既に技巧の上で優れており、同時に右

の玻璃で造つた類の存することよりすると、是等の玉の作られた時期―それは一般に弥生式文化期とせられている―は土器観からする如き石金過渡期などではなく、高い文物が寧ろ急速に進んでいたことが当然認められる可きことにもなる。

禽獣魚形の勾玉類に就いて認められるか様な所見について、上に挙げた遺品のうちに、朝鮮海峡を越えた半島南部での古新羅の出土品に著しい同類を見ることは、なお二例ではあるが、遡つて一般の我が勾玉の問題と聯関するところがあるかに見える。大正十年の慶州金冠塚での夥しい硬玉の勾玉類の出現以後、半島の南半に於ける、同種の玉の分布に著しいものがあつて、うちに羅州蟠南面の古墓群出土品の如き形の上で古調な類を見ることよりして、上に挙げた獣形と虫状の勾玉とはなおそれ〴〵弧例ではあるが、他にも形の便化したもののあること等と併せて、それ等について一応の検討を要するであらう。

但し、その著しい二例たる獣形飾玉（第八図の2）と虫状の勾玉（第一五図の4）の二者は、共に肥前の汲田遺跡で見出された時代の遡るものと同似なものであるが、共に多年の使用をあとづける表面なり、孔縁の磨滅の著しいものであるのは、汲田の玉を超えており、殊に獣形玉は一部破損したものを再加工したことが明らかなのである。加えるに出土した遺跡は古新羅の故都たる慶州の古墓であつて、一は六朝中期の営造と推定される有名な金冠塚たることである。従つて此の場合、半島出土の両者は、同様な北九州での所産が彼土に伝えられ珍重せられて、彼地で伝世して後に古墓に副葬せられたものと見るべきこと、彼土にそれに先立つもののない現在に於いては自から想定される筈である。

韓半島の南部に於ける我が標式的な勾玉の夥しい遺存が知られた当初、それ等に余りに目立つもののあるところから、勾玉の同地域での先行が問題として取り上げられた。併し爾後明らかになつた半島出土の夥しい勾玉類の実体からすると、それ等は既に勾玉としての標式的な特色を具えたもので、且つ曲つた玉としての完成したもの乃至それから派出した複合形であつて、中に上に触れた羅州の所謂甕棺墓に於けるもの其他に若干の所謂我が古式古墳出土品と同似の硬玉品が

認められる次第である。これを出土の遺跡に就いて見ても、分布の範囲がなお漢江の北に及ばない上に、主として三国鼎立時代の古墓に副葬されてあつて、当時日本の勢力の及んだ地域である。これからすると我が勾玉の伝へられたらうこと殆んど疑をのこさない。されば右の古い獣形・虫状の勾玉に於ける半島出土品は、時代の遡る所謂弥生式文化期に於ける我が雕玉が半島へ齎されたことを実証するものとしての意味を持つことになる。[3] ちなみに我が国の勾玉が同じく古く半島に齎されたことを実証するものとして、禽獣魚形の一類に見られる玻璃で作つた別個な所謂練りの勾玉に同じ類例のあることをここで併せ附記する。

註

1 同様な上古の遺物として、古い碧玉製品のうちに、中国古代の特色ある銅製品の一つである銅鉞の形に基いたことの認められる所謂玉製品がある。「上古の碧玉製品の二三に就いて」(『大和文化研究』八の七) 参照

2 故藤田亮策氏「硬玉の勾玉」(西田先生頌寿記念『日本古代史論叢』所収) 其他参照

3 我が上古の珠玉が、この国土での特殊な所産として早く海外への貢物となつていたことは『魏志』倭人伝に見えている。その時期たるや、問題とする玉類のそれと等時代に遡るものであるのは此の場合当然注目さるべきである。

七

獣形品が多い現存の禽獣魚形をした勾玉類が、我が上古の特色ある勾玉の中では、時代の遡るものであり、なほ数こそさ程多くないが、北九州の出土品其他に、それ等が新たに波及した外来の進んだ雕玉術に依る所産たることが察せられるとする前段の性質観に対して、次に遺品の末尾に一括した両三年来特に注意に上つた大きい禽獣魚形の碧玉品となると、それぞれの形態が一層目立つ点で、別に考える可きところのあるのが思われることである。一々の実例が示すように、是等は形では違いわないが、佩玉と見難い大形であるのをはじめ、すべて作りが禽獣魚などそれぞれの形態をよく表わし

て、全く共通した進んだ造形すら認められるものであるのはその性質に聯関する。而もこれ等の玉が標式的な勾玉の中での古式のものと同時代と認められるものたるに於いて、その点を強めることである。但しこの玉類の大きい点は、上来の禽獣形の玉の見存例にあつても、中に第三図の3、第六図のような佩玉としては大に過ぎたものが見受られるばかりでなく、一般の勾玉にあつても、例えば夙に知られた大和巣山古墳出土に係る頭部に刻文のある大形勾玉をはじめ、京都大学文学部博物館に収蔵する河内誉田応神天皇陵附近の出土と思われるものに、長さ二一糎に近い巨大なものがある。近時新たに知られた玻璃の勾玉にほぼ同大のすばらしいものから一〇糎を超えるものがまた少なくないので、固よりそれ等が標式的な勾玉と並んで行なわれた類たることに問題がない。その可なり別個な趣を呈する製作の技術の面でも、別に同じ碧玉を以てした石釧・車輪石・鍬形石など、もと装身具であつた夥しい玉製品をはじめ、玉盒・椅子形品・琴柱形石製品など、古式古墳の副葬品を特色づけるものがあつて、同じ時代に、進んだ右の禽獣魚形の玉の作られたことをまた首肯せしめるものがある。かくてこれ等の大形玉は、上記の類の古い系統を承けながら、本来の佩玉としての勾玉類とは別な意味で作られたことを想定せしめるものである。元来勾玉でのこの種のものの発達が我が古伝に伝へられているのは周知のことであるが、当時に於ける現実のものであつたことが新たに認められるものとせられよう。然らば、その類に獣・魚・禽の三者を存することは佩玉と並んで、此の国土に於ける特色のある勾玉の基くところであらう、作つた民衆の前代の生活のみならず、当時のその面をも反映するものであることがまた窺知されることになる。

我が勾玉の形をしたものの中で、所謂勾玉の範疇を超えた異形の大形品としては、初にも触れたように所謂子持勾玉類のあることが、夙に知られている。それが古墳の副葬品に見受けないことは、複雑なその形と相俟つて早くから注意に上つているものである。四十余年前鳥取県の史前の遺跡の調査に従うた際、筆者は同地にこの遺品の少くないことから、遺品の集成を行つて、玉の性質に就いても触れたことであつた。其後この子持勾玉の類は学者の関心を高めて、研究の一好

対象となり、新たに遺品が見出される毎にその類を加えての所謂形式の上よりする論弁がなされた。そして近年では、その類が所謂祭祀遺跡より出土するものが少なくないと言うので、玉の性質が攷えられるとする傾向を示し、一部では恰もこの類を以て祭祀遺跡を象徴する遺品とするの観を呈している。ところで是等既知の所謂子持勾玉は、殆んどが蠟石乃至滑石などの軟質の材で造られてほぼ一定した形のものであるのと、一般の勾玉との間に形の上での距たりの著しいことは、その性質に再検討される可きもののあるのが思われたことであつた。新たに知られた碧玉の大形禽獣魚形の玉類はこの点でまさに子持勾玉に先行するものに該当することが自から認められるわけである。

これを実物に就いて見るも、巧みに造られた禽獣魚形の勾玉のうちには、子持勾玉を特色づけている周辺に作られた所謂子玉なる附加の飾が、背脊を主に、腹部其他に既に作られたものがあつて、その上に具体的な先行の玉たることを示すものがある。更に既往の研究者の注意から逸した所謂子持勾玉のうちに、禽獣魚形玉の一類に於いて見られる一方に頭首たる形をとどめたもののあること、その類の解説の条に併せ録した如くである(第二〇図)。その一例たる三河保美の弥生式遺跡出土品は、右の古い禽獣形玉での或者と形の上での同似をも示すのである。筆者の手許に集めた子持勾玉の遺例にそれぞれの形が、両者の推移の段階にあることをほぼ確められるものがある。さればこの点で禽獣魚形の一類の勾玉こそは、これまで顧みられなかつた所謂子持勾玉に先行し、言はばその形なり性質のもとづくものに当ることが実証されるわけであらう。

之を要するに新たに知られたこのの禽獣魚玉の一類は、古い禽獣形のそれと同似を示しながらも、それぞれの形が目立つて大きいこと等から、既に本来の佩玉としての範囲を超えたものである。而もそれは従来別個なものとして取扱われて来た子持勾玉と形の上で聯関する先行するものであるのを同時に示している。さればなお数は多くないが、是等碧玉品は佩玉としての特色のある勾玉と並んで行なわれたものとして、溯つてこの種の玉の所産の基くところ、元来狩猟生活と結

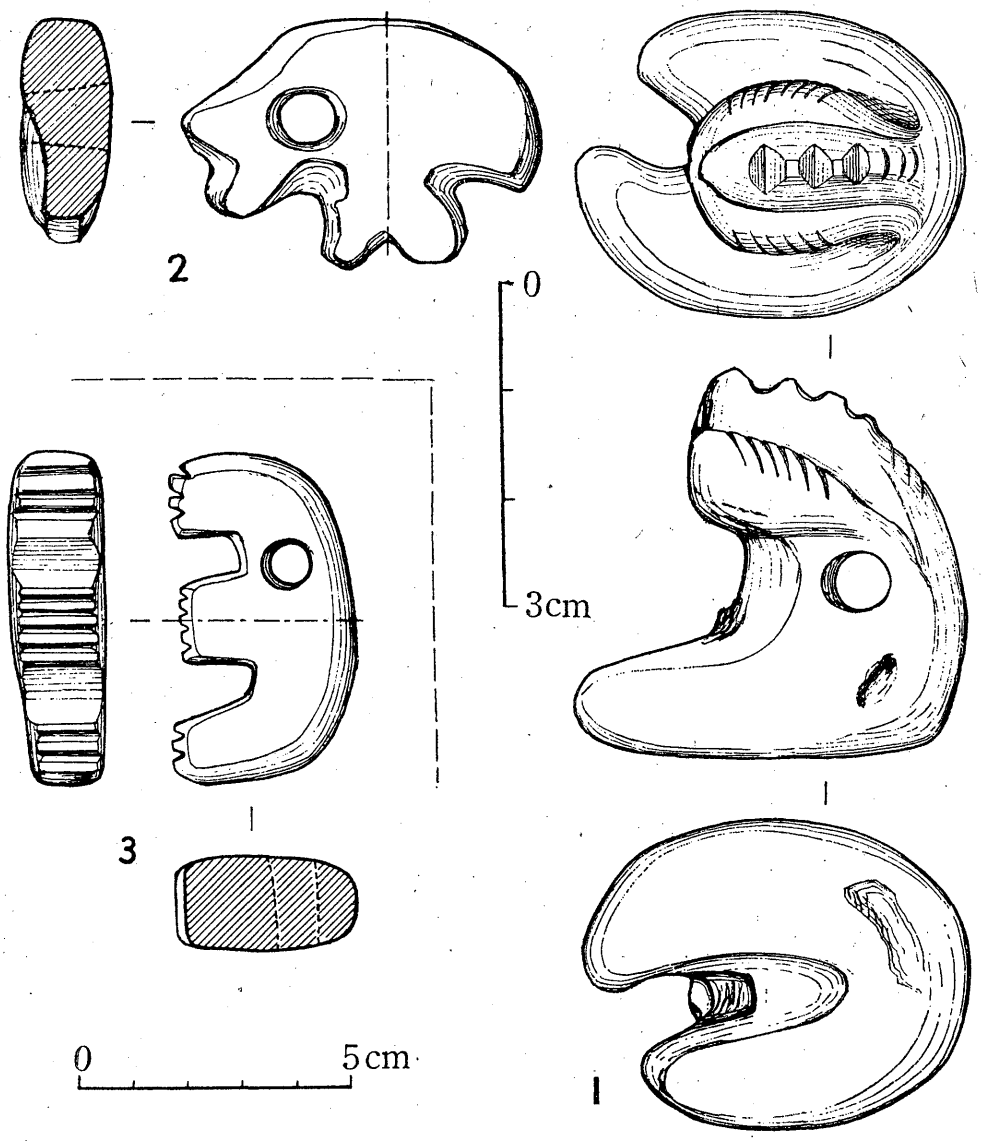
びついた我が上古本来の勾玉のうちにあつて、獣形の他に禽魚の両者にもまた同様な作りのあるのが改めて注目さる可きである。筆者は嘗つて子持勾玉について、その示す形の上から、その形に狩猟・魚撈の豊饒の意味の表徴されているのではないかを思つたことであつたが、新たに知見に上つたこの類が、禽獣魚の三者に亙るものであることは、当時既に農耕の生活が一般化せられたとする間にあつて、依然としてこの国土での本来の生活の面の佩玉を超えた、是等の玉類に示現されているものとして、一見游離した観のある本禽獣魚形の玉の持つ重要な意味が改めて思われることである。

（昭和卅九年十二月廿三日稿）

補　説

上古の禽獣魚形勾玉に関する本文をまとめて旬日の後、たまたま『芸術新潮』の正月号を読んで、京都の善田氏蒐集に係る硬玉の勾玉類に優れたもののあることを窺知した。同氏の玉の蒐蔵はなお殆んど知られていなかつたので、うちに禽獣形の勾玉もあるだらうことが思われた。依つて早速古曽志氏を通じて氏の蒐集品の観賞を請うたのである。七十を超える数多い多年蒐儲の同氏の勾玉類は、その形なり質の上でまさに神戸の白鶴美術館の遺品に比肩すべきのものであつて、同じくうちに十数の所謂獣形勾玉が含まれており、それ等が本文に説いた玉と同様なものであるのを知つた。さればここにその所見を補記する。

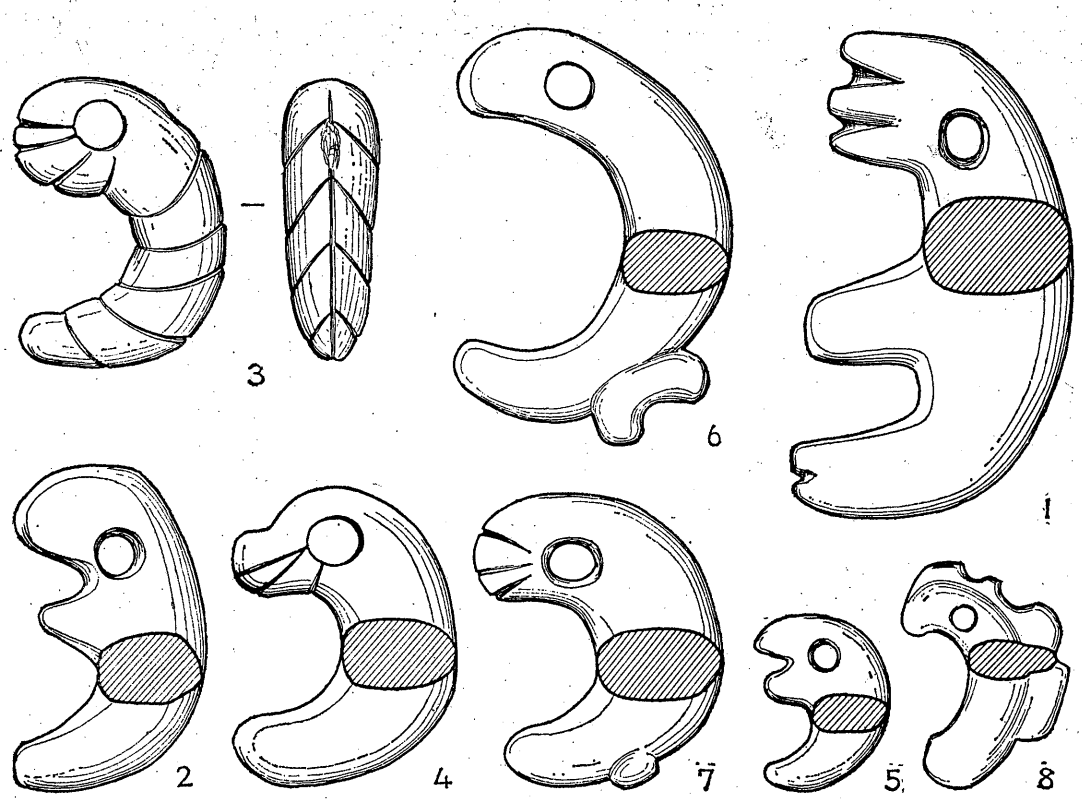
新たに観ることの出来た善田氏の蒐集の勾玉類は、氏が若き日より四十余年の永きに亙つて鋭意蒐集の上、愛蔵したものであるので、所謂考古学の側からは本文でのそれ等の多くと同様に、すべて出土地の明らかならぬ古美術品化したものである。併しそれ等の勾玉類に於いて現実に認められることは、既知の蒐集品と同じく、硬玉で作られた勾玉では、形の上で古くて、而も優れたものたる通性をよくそなえたもので、この点は所謂古式古墳に副葬せられた類と同じく、同じ硬



補第一図　善田氏収蔵獣形勾玉形状図

玉の玉での南鮮出土品の示すところと明らかに違う古いものである。そして古い玉の蒐集品の常として異形の品がより多く珍重せられることではあるが、本蒐蔵にあつても、上記の白鶴・藤田両家の蒐儲と共に、獣形その他のものの稀でないのは、本文の所論に対する重要な資料たることを示す。なほ、此の場合、それぞれの玉がすべて手なれて、特に穿孔の縁辺などに佩玉としての永い使用の形迹をとどめているのは、性格とも聯関することをも自ら示すものでもある。

さて十数個を数える善田氏蒐儲の所謂異形勾玉の殆んどは獣形品で、それ等は本文に列挙したと同様な諸品であるが、別に古拙な獣形をして、従来なお同様な遺品を見ない著しいものもある。中での獣形品では、古くから櫛形玉と呼ばれる本文の初に挙げたと同じ類に目立つものが存して、三個を数える。



補第二図 善田氏収蔵硬玉獣形勾玉畧図

その一は長さ六・一糎を測る大きさで、緑色の透明に近い硬玉—現在表面に淡白の班状を呈する—で造られてある。玉の形は肥前汲田遺跡出土のそれ(第二図の3)と同様で、穿孔の位置こそやや違うが、頭・腹・尾の端に横の条線を刻することなども殆んど違わない(補第一図の1)。高度の彫玉の技巧を以てした硬玉でのこのような同似は、同一の優れた工人の所産ではあるまいかを思わしめるほどである。その二は、いく分か小さいが、またよく似た形のもの。やや角張つた体には、頭辺の口部に当る彫線の他に、尾端にも同じ切り込みがあること畧図(補第二図の1)の如くである。長さ三・四糎のいま一つの遺品は、同形ながら腹部の突起が小さく且つ先が尖つていて、頭に切目がなく、孔の大きい点で第三図の2・3の玉との云はば中間的とも見られる形である(同上の2)。

次に蒐儲の異形勾玉での遺例は、本文での前者につづいて挙げたと同じ頭部のみが獣首形をした良質な硬玉品である。その頭部のみが獣形を示すものに長さ三糎の完好品がある(補第二図の4)。形は本文での大阪藤田美術館収蔵の長さ五・七糎ある濃緑色の遺品とよく似ている(補第二図の4)。また他に(補第二図の5)簡単ではあるが、大きく口を開いた頭部の目立つ長さ三糎のものがある。玉の体

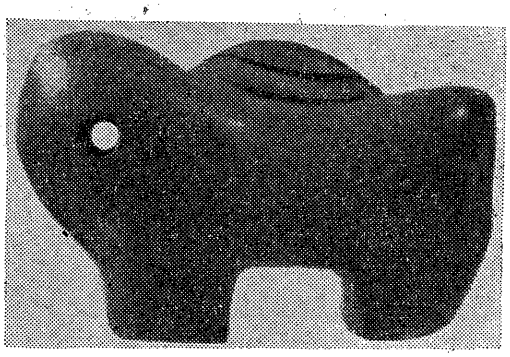
の背を中心に所謂葉脉形を全面に刻して、而も虫状に似通つた形をした長さ六・八糎の一個は、また勾玉として形の整つたものである（補第二図の3）。この形はもと寧楽美術館にあつた遺品とよく似て、それに雁行する高度の作行であるのが認められる。やや角張つた玉の体軀の両側に同じ葉脉状の刻紋のある長さ二・三糎の一個は、頭辺に於ける切目は殆んど目立たないが、別に背の部分に複合鋸歯様紋帯を細刻している。従つてこの種の玉が当時稀なものではなかつたことが推されることである。

善田氏蒐集品で獣形たることをよく表わした遺品の一つは、氏が猪玉、銘山路と名づけて愛重する高さ二・二糎、長さ三糎の大きさのものである。これは淡緑の原石の名残をとどめた扁平の体で、腹部の突起した先端が分れて双脚状をなし、大きく口を開いた部分につづく鼻梁から上が野猪を思わしめる形である（補第一図の2）。いま全面に手なれの迹が著しい。この玉は一見従来所謂史前—縄文後期の原始勾玉とせられているものとよく似ている。しかし玉それ自体が示すように硬い青琅玕の加工品である点で固より上古の獣形勾玉の古いものたること明らかである。

他の一個は高さ三・五糎を測る、形の上でより原石に左右せられた原始的な形の、而も顕著な獣玉である。白色に青緑の斑条が恰も縞状をなすのは、多くの硬玉の玉とやゝ違う質で、面の光沢度の高いこの玉は、その尾端が二つに分れ、器腹に大きな穿孔の開いた、坐獣形をしている（補第一図の1）その形は史前の所謂貝塚勾玉と似た同じ原始的なものである。併し実物そのものの示す所は、頭孔が明らかに鋭利な金属器で穿たれている点が、上古の勾玉と同じであるのに加えて、その頭辺から背に亙る細部を表わした刻法なり、更に頭首のふくらんだ両横に当る部分での鬚の刻線の上に獣玉例での、なお例の多くない古いものと同様であることが挙げられて、同じ上古の遺品たることは疑う可くもない。而してこの原始獣玉の示す形が、虎とも見られると共に、上半の体軀に中国の竜形に似通つているのが認められることである。

以上の獣形の主な遺品の他に、善田氏の蒐集硬玉勾玉には、なお本文の後半に記したのに似たものがある。その一は玉

の背に突起を造つて、それが禽獣玉の名残と見られる長さ二・二糎の例（補第二図の8）であり、また勾玉の背の一部に所謂子形の勾玉を造つた長さ四糎の半弧に近い遺品（補図の6）の如きもある。前者は藤田美術館収蔵の硬玉勾玉中のやゝ角張つたもの（長二・八糎）と共に、本文での碧玉大形品（第一二図の1）と似た硬玉での古拙なものであり、後者は初に異形勾玉として挙げたものよりも形の上で所謂子持勾玉との聯関を示唆する例と見られる。而して二者がいずれも硬玉の玉として、作りの上で古い部類に属するのはまた本文の所見と相表裏する資料たるものである。なほ別に其後新たに知り得た碧玉の大形の獣玉に入江喜太郎氏の提示した一遺品がある。これは大きな勾玉の背に所謂下駄の歯に似た前後肢を造つて、腹に当る上辺に山状の突起を作つたものであること挿入の補第三図の如くで、高さ五・五糎、長さ九糎で、造りなどすべて、本文での一類と違わない。



補第三図　碧玉大形獣形玉

善田氏蒐集の上古の硬玉勾玉の中での獣形の類は、本文に挙げた主な形のものに亙つていて、而も所謂櫛形勾玉をはじめ、全く同じ形なり造りのもののあること以上の如くである。従うて現在是等の玉の新たな発掘品はなお乏しいことではあるが稀なものでなく、標式的な古い勾玉に先立つとする禽獣形勾玉観をば基くところの遺品の面で強めることである。それと共に是等の遺品は出土地こそ明らかでないが、玉そのものの作りなり形其他より見て時代の遡るものたる所論に合致するのも明らかである。それ等の玉の推定年代が従来一般に出土の遺跡、殊に古墳の示すところから導かれているのに対し、是等の優れた硬玉の禽獣形の勾玉類が一連の古い標式的な硬玉勾玉類と共に、硬いこの玉に佩用の痕をとどめている事が、玉そのもののそれよりも先立つ所産たることを裏書きする。かくてこのことは我が国土に於ける玉の文物の発達が、現在一般に弥生式文化なる低い段階とせられる時期にあつて、進んだものであつたことを示すものとせられることに帰着するのである。

（昭和四十年一月廿五日）